

Z32-B88

島崎藤村 有島生馬 監修

金の船

八月號



第二卷
第八号

大正九年八月一日發行

大正九年七月五日印刷

国立国会
8. 3. 26

inches 1 2 3 4 5 6 7 8 9
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C
Y
M

© Kodak, 2007 TM Kodak

船の金



号八才 卷武次



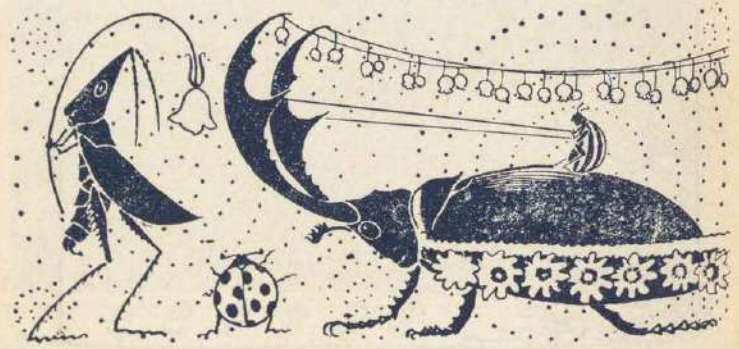


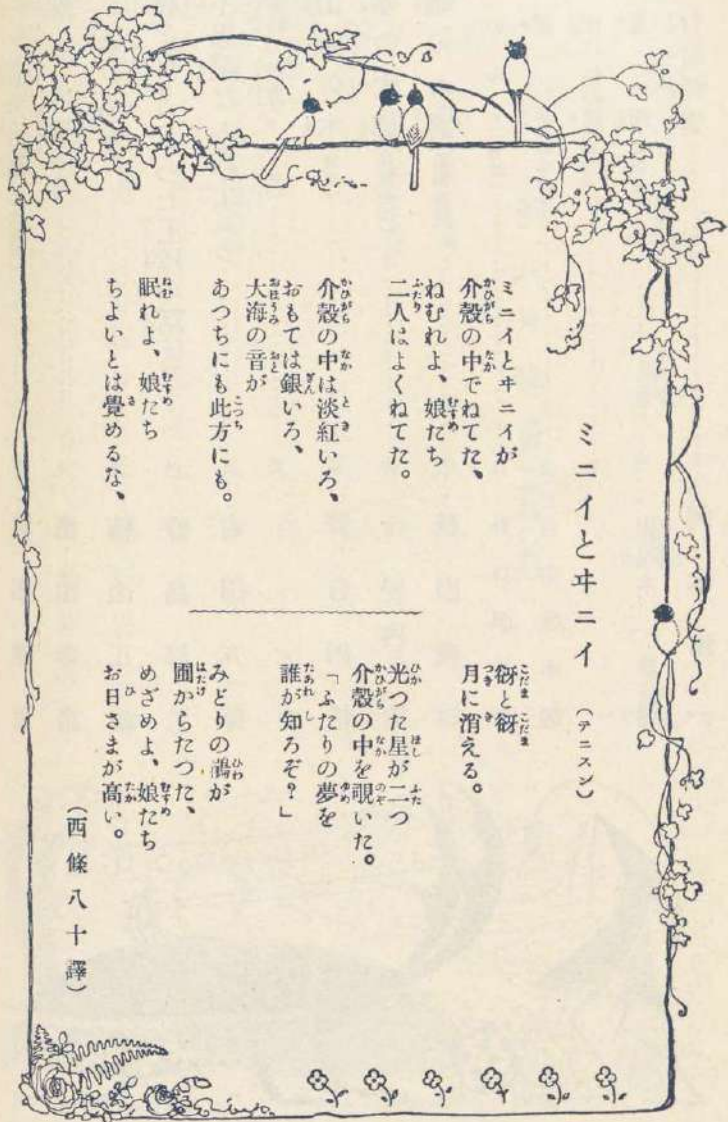
金の船 八月號 (第二卷第八號)

人魚 (表紙、石版刷)	岡本歸一
ミニイとキニイ (童話)	西條八十
燕 (童話)	一本居長世
六さんと九官鳥 (童話)	野口雨情
はだか (童話)	西條八十
山六爺さん (童話)	若山牧水
羊の偽物 (童話)	沖野岩三郎
頼智の頼平 (繪話)	齋藤佐次郎
	岡本歸一



一ノ谷の合戦 (歴史童話)	窪田空穂
聖者と狼 (童話)	横山壽篤
三匹の鼠 (童話)	楠山正雄
鼻を取りにやつた王様の話 (童話)	野島辰二
不思議なお武士 (童話)	吉田六郎
蜜蜂の飼方 (ボンチ童話)	天
山椒の木 (童話)	野口雨情
琴の太郎 (長篇童話)	小山内薫
蟻のお國 (長篇童話)	長田秀雄
いちご (童話)	野口雨情
雲雀 (幼年詩)	若山牧水
雨はれの間 (綴方)	七
夏の街 (自由畫)	八
口繪挿畫	岡本歸一





ミニイとキニイ (ラニスン)

ミニイとキニイが
介殻の中でねてた、
ねむれよ、娘たち
二人はよくねてた。

介殻の中は淡紅いろ、
おもては銀いろ、
大海の音が
あつちにも此方にも。
眠れよ、娘たち
ちよいとは覺めるな、

銚と銚
月に消える。

光つた星が二つ
介殻の中を覗いた。
「ふたりの夢を
誰が知るぞ？」

みどりの渦が
圃からたつた、
めざめよ、娘たち
お日さまが高い。

(西條八十譯)

つばめ

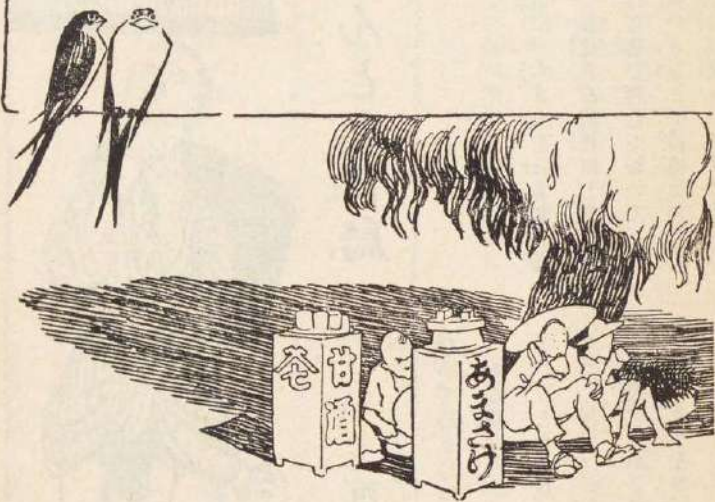
作曲 本居長世
作歌 野口雨情

0 5 1 2 3 3 4 | 5 — 3 5 |
ツバメノカカサシ
ちちやのおもてに

6 — 1 6 | 5 — 3 0 | 0 2 3 2 7 7 |
レエ カンカーサ
たソロカーヒ
ン

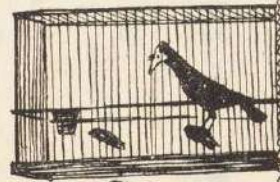
0 1 3 1 6 6 | 0 5 1 2 3 5 | 5 2 3 1 0 ||
カンザシカーチヤ
ハバのはいれかかーロ
ん

買つてやる
 牛乳屋の
 表に
 遊んでた
 母さん
 燕は
 洒落母さん



燕の
 野口雨情
 母さん
 洒落母さん
 揃ひの
 簪





六さんと九官鳥

西條 八十

なつてゐました。

甲州街道の高井戸の宿に、六さんと云ふ若い呉服屋が住んでゐました。お父さんが死ぬときにくさんの財産と、りつばな店を残しておいてくれたので、六さんはさう朝から晩まで荷物をかついで歩いたりしなくとも、樂に遊んで暮せるやうに

ある朝、六さんが店さきで煙草をすつてゐますと、ひとりの見なれない田舎者がズツと入つてきて、
「旦那、いかゞでせう？ 九官鳥をひとつ買つて下さいませんか。」
と云ひました。見るとその男の右手にさげた籠

の中には、まつ黒な、眼の鋭い鳥が一羽入つておりました。

田舎者はベコ〜お辭儀をしながら、かう返事をしました。

「そんなものは入らないよ。」
と、六さんはすげなく斷りましたので、その男は黙つて頭をさげて出て行かうとしましたが、そのとき、何おもつたものか籠の中の九官鳥は急に聲をあげて、

なにしろ人通りの多い街道のことですから、朝に晩にいろ〜な旅人が珍らしさうに籠をのぞき込み、この、人の言葉を真似る鳥をしきりにからかつて行きました。なかには「お前さんは誰だ？ お前さんは誰だ？ 高井戸の六さん。」など、云ふ言葉を丹念に教へてゆく人もありました。

「ロク、ロク」
と、啼きました。

利巧な九官鳥はいつかこの言葉をすつかり覚え込んでしまひました。さうして水や食物のほしい時には、嘴で籠の格子をつツ突き、白眼をギョロつかせ、首をふつて、「お前さんは誰だ？ お前さんは誰だ？ 高井戸の六さん。」と啼いてねだるや

「オヤ、この鳥はおれの名まへを知つてるせ。」
と、六さんは驚いて、

五

「して見ると、おれに縁のある鳥かも知れないから買つて置いてもいい。いつたい幾らなんだい。」
と、その田舎者を呼びめてきました。

「ハイ、お安くおまけ申して八圓でよろしうござります。」

五

うになりました。

さて、六さんには一つわるい癖がありました。

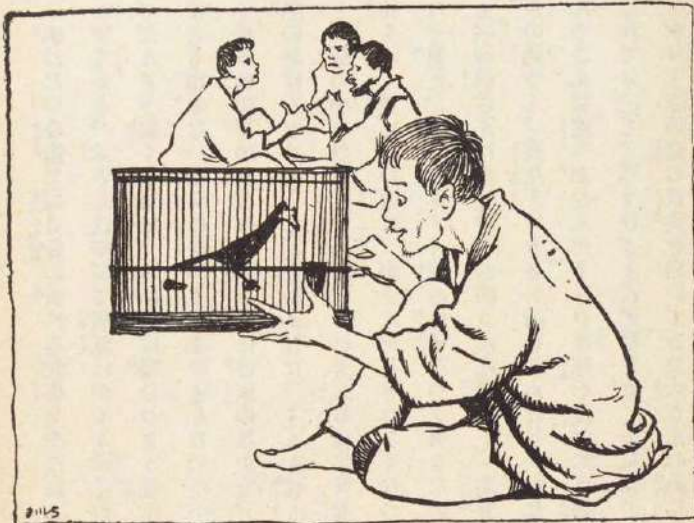
それは生れつき賭事が大好なことでした。その癖が次第にはげしくなつて、しまひには商買の呉服屋なんぞはそつちのけで、毎日おほせの仲間を自分の家の奥座敷へあつめて、骨牌などをしてはお金の遣り取りばかりするやうになりました。

九官鳥はもうその頃にはすっかり家の人に馴れ切つて、籠から出て家ぢうをどこもかも飛んで歩くやうになつてゐました。それでよくおほせい人の集つてゐる奥座敷などへも入り込んで、賭事をやつてゐる傍でチョコナンとして見てゐました。

賭事を一心にやつてゐる連中は、誰かそのうちの一人が勝つてたくさんのお金を貰ふと、聲をそかへて、

「畜生！ うまい所をしめたな！」

九官鳥だけは永い間のなじみでどうしても可愛くて手ばなす氣になれず、自分のわづかな食物をわ



六

と叫ぶのでした。九官鳥はいつかまたその言葉を覚え込んでしまひました。さうして今度は、まへに覺えた言葉につけ足して、「お前さんは誰だ？ お前さんは誰だい？ 高井戸の六さん！ 畜生！ うまい所をしめたな！」と、啼くやうになりました。

その間に六さんはかんじんの商買をほつたらかして好な賭事ばかりしてゐたものですから、お客は無くなる、店の品物はごまかされる、そのうちには悪い者にだまされたりなどして、たうとう一文なしになつてしまひました。

六さんは途方に暮れて東京へ出て來ました。さうして土方の仲間入りをしました。親分の家の汚ない二階に置いてもらつて、朝はやくから夜おそくまで汗をダラ／＼流しながら、泥を掘つたり石を磨いたりして働いてゐました。けれども例の

けてやつてもやつぱり傍に歸つてゐました。

ほかの土方たちは、六さんのどことなく品のいい様子と、また傍にゐる九官鳥を見て、これはもとのから土方ではないと想ひ、折々、

「なんでこんな處へ來たんだ？」と、たづねました。六さんはかう云はれるといつも悲しさを顔をして、

「ツイ悪い友だちに誘はれてネ。」と答へるのでした。

抜目のない九官鳥は、またぞろこの二つの言葉を覚え込んでしまひました。さうして食物をねだる度毎に、以前に覺えた言葉に付足して、「なんでこんな處へ來たんだ？ ツイ悪い友だちに誘はれてネ。」と喋るやうになりました。

二

七

馴れない身體で毎日骨の折れる仕事をやつたものですから、六さんはやがて病氣にかゝり、それがだん／＼重くなつて、つひには寢たつきり動くことも出来ないやうになつてしまひました。

ある秋の日の夕ぐれ、六さんは寢床のなかで、熱のかげんでウト／＼してゐました。すると枕もとの籠の中にゐた九官鳥は、これも二日ばかり食物も水も貰はないので、がまんがしきれなくなつたと見え、嘴でガタ／＼籠の格子をつツ突きながら、「お前さんは誰だ？ お前さんは誰だ？ 高井戸の六さん。畜生！ うまい所をしめたな！ なんでこんな處へ来たんだ？ ツイ悪い友だちに誘はれてネ。」と、つゞけざまにどなり立てました。ヂツとこの鳥の言葉を聞いてゐた六さんの胸には、にはかに、自分が今日まで送つてきた愚かな生涯のことが浮びあがりました。

し、やつとのことで籠にとりつき、ぶる／＼眠える手でその蓋をとりました。さうして九官鳥をつかまへて窓から、
「サアどこでも好きなところへ行け！」と云つて放しました。さうしてハタ／＼嬉しさうに飛んでゆく鳥のうしろかげを見送つたあと、六さんはさも安心したやうに、寢床へもどつて死んでしまひました。……

窓から放された九官鳥は、はじめて自由な身になつたので、嬉しさにあつちへ飛びこつちへ飛び、屋根から屋根をわたつて、どことあてもなく飛んでゆきました。するとやがて人家の盡きたひろびろとした野原へ出ました。このときにはもう日がつつ暮れて、空には星がすゞしさに輝いてゐました。九官鳥はすつかりいゝ氣もちになつて、

「あゝ、なんておれは馬鹿な真似をしたんだらう！ お父さんがあんな澤山の財産をおれに残してくれたのに、家の者や親類のいさめをも聞かず、賭事ばかりしてこんな土方とまで落ちぶれ、そのあげくこの汚らしい二階で死ぬなんて。あゝ情ないことだ！」

六さんは湧いてくる後悔の念に、おもはず枕にしがみつき、大粒の涙をポロリ／＼こぼして、男泣きに泣きました。
しばらくたつてから六さんは涙でぬれた顔をあげて、
「さうだ、おれは生れてから今までに一つだつて善いことをしなかつた。だが死ぬまへに、せめて一つだけ善いことをして行かう。さうだ、この九官鳥を自由な身體にしてやらう。」
かう呟いて六さんは、ヨロ／＼寢床からはひ出

羽根をひろげて、なほも草の上を勢よく飛んで行きますと、急に白い網のやうなものにハタと突き當りました。さうしてそれなり首も手足も何かに絡みついたやうになつて、出ることも引くことも出来なくなつてしまひました。……
そのうちに夜が明けて、あたりがあかるくなつてきました。

九官鳥が身のまわりを見ると、自分が野原に張つてある、鴨を獲る網に引つかゝてゐることに気がつきました。
覗くと自分の下の方には、鴨が何羽となく、やはり網の目に首を突込んでギャ／＼啼いてゐました。
やがて藪のかげから一人の百姓が出てきました。
「ヤア、たいそう掛つてゐるなあ。」

と、その男はうれしそうに云ひました。それから網で鴨や九官鳥をくるんだなり、肩にかついでトコトコ歩きだしました。

百姓が戻ってきたのは、一軒の物置のやうな小屋でした。その中へ入ると、百姓は、入口の戸や窓をしめ切つて、バタ／＼網をふるひ出しました。

かはいさうな鳥たちはみんな啼きながら轉り落ちました。九官鳥はすばやく飛び下りて、蔭の處へ隠れておりました。

そのうち百姓があんまり手荒な事をするので怒つたか、一羽の鴨がギャツと云つて、その手の甲を啄きました。

「痛い！」
と百姓は聲をあげましたが、直ぐ大怒りに怒つて、

「こいつめ！ どうするか見てろ！」
と、となりざま、その鴨の頸をギョツと絞めて殺してしまひました。その時

です、隅の暗い處をポツ／＼歩いてゐた九官鳥は、だしぬけに聲を出して、

「畜生！ うまい所をしめたな！」と、云ひました。
びつくりしたのは百姓で、キョロ／＼あたりを見まはし、

「ハチ確かに聲がしたが、この前屋にはおれよりほかに誰もあるまいし、戸は

締つてゐるし、どうも不思議なことが有るものだな。」
と呟きましたが、別に人のゐるらしいげはひも無いので、それなりまたは

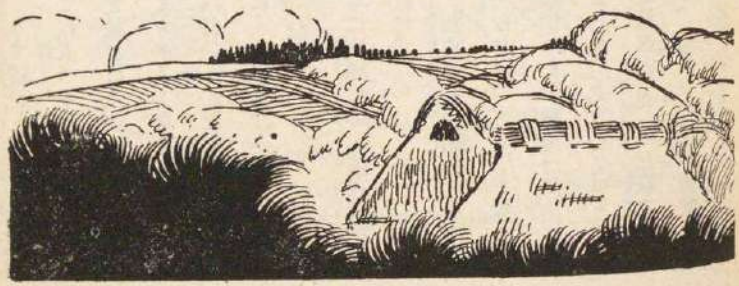
かの鴨に手をかけやうとしました。するとその途端、九官鳥は薄暗いところ

から、もう一べん、
「畜生！ うまい所をしめたな！」
と啼きました。

百姓は驚いて棒立ちになりました。さうして
聲のした方を見て、
「お前さんは誰だ？」
と、たづねました。と、聲に應じて、
「高井戸の六さん！ 高井戸の六さん！」と、

九官鳥が答へました。
「なんでこんな處へ来たんだ？」
百姓はおつかなびつくり押し返してきましました。

「ツイ悪い友だちに誘はれてネ。」
と、九官鳥の聲がハツキリ返事しました。





二
 うす暗がりを見て、そ
 こに人つ子ひとり居ないの
 を見た百姓は、真青になつ
 てガタ／＼身を顫はせ、
 「たいへんだ！ たいへん
 だ！ 化物だ！」
 と、どなつて、まつしぐ
 らに納屋の外へ逃げだしま
 した。
 九官鳥を先頭にした鴨の
 一むれは、ゾロ／＼百姓の
 後について納屋から出てき
 ました。さうしてもういち
 ど暗れわたつた秋空たか
 く、そろつて飛んでゆさま
 した。(をばり)

はだか

若山牧水

裏の田圃で
 水いたづらをしてゐたら
 蛙が一疋
 草のかげからびよんと出
 はだかだ／＼と鳴いた
 やい蛙
 お前だつてはだかだ



山六爺さん

(長篇童話)

沖野岩三郎

六

村の人達が皆な集つて来て、大名行列を見ても居ますと、其所へ立派な大小を腰にさした、庄屋様が來まして、

「これは、山六爺様の御殿様。能くこそ御出で下さいました。」と叮嚀に叩頭を致しました。

「おや、あなたが庄屋様ですか。何所かでお目にかゝつたやうですネ。」

山六爺さんは、牡鹿の背から問ひました。すると、婆アさんは牡鹿の背から、にこ／＼笑ひ乍ら、

「爺さまのお殿様、忘れしましたか、そうれ：：此間、あのお蕎麥の團子を食べた丘の上で：：」と云ひますと、爺さんは、

「あ、さう、然る木の枝から泥棒さんが十八人降りて來たので、びつくりして、茶畑へ逃げ込んだのは、あなたでしたか。」と言つて、ハ、ハ、と笑ひました。

四十八人の家來達も一度にワハ、と笑ひました。

庄屋様は頭をかきながら、

「恐れ入りました。私はこんなに立派な大小をさして居ながら、泥棒を見た時、急に恐ろしくなつて、茶畑の中へ隠れたのでございませう。どうぞ、お殿様御免下さいまし。」と云つて、ブル／＼と慄へておりました。

「庄屋様、庄屋様、泥棒さんだつて、矢張り人間ですよ、ちつとも咬みつきも、蹴飛ばしも致しません。かわいさうに、あの人達は貧乏で食べるものが無いから泥棒さんになつたのです。御覽なさい。其の泥棒さんは私の家來になつて、彼の通り立派な大名になりました。」

「えッ、大名に？ あ泥棒様が大名になりましたか。」

庄屋様は、眼をぐる／＼廻し乍ら、四十八人の家來達を眺めました。





「おい、ろ右衛門、ろ右衛門、お前方にはあける國が無い。」と爺さんが言ふと、婆アさんは、ハタと手を拍つて、

「爺さん、善い事がある。王様にしよう、王様に。」

「夫れは善い思ひつきだ、では残りの十五人は王様にしてあげよう」

婆アさんは大きな聲で、

「ろ王、に玉、へ王、ぬ王、る王、よ王、れ王、そ王、ら王、ま王、け王、こ王、ゆ王、め王、も王……」と云ひました。

すると俄かに其の十五人は、

「俺達は王様だぞ、大名より偉いんだぞ。」と威張り出しました。

其時庄屋様は静かに進み出て、

「もうし、い右衛門さまから、す右衛門様までは皆な、大名や王様になりましたが、爺さま、あなたは、どんなえらいお方に、お



其時、山六爺さんは、鹿の背から大きな聲で、

「さア、皆な集まれ、あなた方を皆な大名にしてあげる。私の今つけてあげる名前を各々に忘れないで覚えて居て下さい。」

「伊豫の守い右衛門。」と爺さんが呼びますと真先の、い右衛門が、

「おうー。」と返事をしました。

「播磨の守は右衛門。」と婆アさんが呼びますと、三番目の、は右衛門が、

「はアい。」と返事をしました。

爺さんと婆アさんとは、交る／＼一人に名前をつけてやりました。

「伯耆の守は右衛門。土佐の守と右衛門。筑前の守ら右衛門。陸前の守り右衛門。尾張の守を右衛門。若狭の守わ右衛門。加賀の守か右衛門。但馬の守た右衛門。對馬の守つ右衛門。根室の守ね右衛門。長門の守な右衛門。陸奥の守む右衛門。羽後の守う右衛門。磐城の守む右衛門。能登の守の右衛門。近江の守お右衛門。劍路の守く右衛門。大和の守や右衛門。豊後の守ふ右衛門。越前の守え右衛門。天鹽の守て右衛門。安房の守あ右衛門。相模の守さ右衛門。紀伊の守き右衛門。美作の守み右衛門。信濃の守し右衛門。越後の守と右衛門。常陸の守ひ右衛門。攝津の守せ右衛門。周防の守す右衛門。レ

さア、此の三十二人は俄かに大名になつたのですが、残りの十五人は、大名にしてくれないので、皆なブツ／＼と不平を言ひ初めました。



なりなさいますか。」と尋ねました。

「私と婆アさんとは、これから家來になります。」

「えッ？ あなた方が家來に？」

「えエ〜 私共は家來で結構です。」

爺さんも婆アさんも、さう言つて、にこ〜と笑つてゐました。

「では、御伺ひ致します。あなた方の總大將は、どなたでございませうか。私は此の腰にさしてゐる大小を總大將様に差上げたいのでございませう。」

庄屋様は、腰の大小をとつて、山六爺さんの前へ差出しました。

「では、これから、總大將を投票で決めませう。」

爺さんは懐から、鼻紙を取り出して、夫れを庄屋様から受取つた刀で、四十八枚に小さく切つて、

「總大將に誰をしよう。さア、みんな此の紙片へ其の名を書きなさい。」と申しました。四十八人は庄屋様の腰にさしてゐた「矢立」といふ墨池を借りてめい〜に紙ぎれへ、總大將の名を書きました。備、いよ〜其の投票を備へて見ますと、「二匹の狼殿」といふのが三十二票、「黒様」といふのが十五票ありました。

そこで爺さんは、大聲で、

「さア、今日から、狼殿が我々の總大將軍様で、黒が副將軍様だぞ。あなた方は大名と王様、私と婆アさんは家來です。」と申しました。

四十八人は皆なバチ〜と手を拍つて笑ひました。すると庄屋様は、

「では、これから直ぐ、お乗物を三挺持つてまゐりませう。」と言ひました。夫れを聞いた爺さんは直ぐ、大きな聲で、

「夫れなら、伊豫の守、播磨の守、伯耆の守、土佐の守、筑前の守、陸前の守、の六人は庄屋様の御屋敷へ行つて、お乗ものを擔いでいらつしやい。」と申しました。

「宜しうございます。」と云つて六人は、村の方へ駆け出しました。

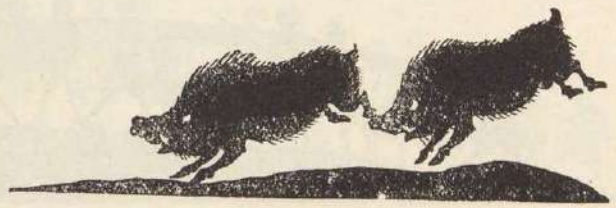
暫くして六人は立派なお輿物を、三挺擔いで來ましたので、早速夫れへ、狼二疋と、黒とを乗せて、婆アさんは牡鹿に乗つて、一番前の旗持になり、爺さんは牡鹿に乗つて大小を左の手で腕の下に抱えて、狼大將軍の、刀持になりました。

すると、残りの殿様と王様とは、皆な代る〜總大將と副將軍の





「狼の大衆、頼みますよー」と言ひました。二疋の鹿は爺さん婆ア
 さんに乗せて、きよとんとして立つてゐました。
 今まで氣持よく坐睡つてゐた黒は、ワン！と一聲吠え乍ら、輿
 物の中から出て來ました。欠伸をしてゐた二疋の狼も、ウーウ、と
 唸り乍ら、絹蒲團の上から飛出して來ました。(つづく)



お輿物を擔いで、静々と村中を練りあるきました。
 「大名行列だぞ、大名ばかりの行列だぞ……」と云つて、村の
 人達が皆な、家の中から飛出して來て、狼と犬のお輿物を、拜み
 ましたが、狼は何の爲に拜まれるのだから、知らないもんだから、輿
 物の中で、ウーウ、アアア、と大きな欠伸をしてゐました。黒は心
 持よく、こくり〜と坐睡りをしてゐました。
 不思議な行列が村を通り抜けて、大きな高い山の麓へ差かゝると
 これはまア、どうした事でせう。山の上から大きな〜猪が二疋、
 フウーツ！と唸り乍ら、真白い牙をむき出して、飛び出して來ま
 した。夫れを見た、伊豫の守も、土佐の守も皆な、
 「ひやーツ！」と言つて、總大將軍の、お輿物を、路の上に投出して
 置いて、皆生命からん、松の幹や杉の枝に這ひ上りました。他の大
 名達も王様も、皆「ひやーツ、大變々々」と言ひ乍ら、眞蒼にな
 つて皆木の枝に這ひ上りました。山六爺さんは大小を掴んだまゝ、
 「黒、しツかりせエ！猪だぞ！」と叫びました。
 婆アさんは旗を、びゆう〜と振廻し乍ら、

羊の偽物

齋藤佐次郎



これは、フランスの小さな村にあつたお話ですよ。
 チュエノといふ十五歳になる少年が、年をとつたお母さんと二人切りでゐました。
 大層貧乏してゐるので、家の有様つたらお話になりません。風が吹けば、ぐら／＼揺
 れて今にも壁が落ちて来て、二人を壓しつぶして了ひさうにします。それでも、チュ
 エノは平氣なもので、一日中街中をぼ／＼つき歩いて、働かうともしません。自分の目
 の先きでどんな事があらうと本當に無頓着で、地面の上ばかり、キヨロ／＼見て歩き
 ます。

「お前は本當の大馬鹿だね。」といつて、お母さんは、時々叱りますが、元來人のい、
 母親の事ですから、その後ではいつも笑ひながら、
 「お前なんかには、狼の尻尾をつかまへて生け捕る事は、出来ないだらうね。」
 と、いつては、嘲弄しました。

二

ある日の事、お母さんはチュエノに、寝床を掃へるのだから、森へ行つて枯葉を掃

取とつてお出でといひました。チュエノは早速森へ出かけ
 ましたが、枯葉を集めきれない内に雨がザ／＼降つて來
 ました。幸ひ傍に大きな樹の洞があつたので其處へかくれ
 ました。處がその中は、から／＼に乾いてゐて實にいゝ氣
 持ちなので、チュエノはぐつすり寝て了ひました。

やがての事、犬の様なものが、入口をがり／＼とひつか
 くので、チュエノは目を感じましたが、思はずギョツとし
 ました。見ると、自分のすぐ真上で、大きな毛のムク／＼
 した獸が、尻尾を先にして後退りし乍ら降りて來ようとし
 てゐます。

「ヤツ、狼だな。」と思つて、チュエノは身體を縮めてぶる
 ぶるふるへてゐました。

狼はそろ／＼と樹の中へ降りて來ました。チュエノは膽
 をつぶして了つたので、堅く石の様になつて、息さへ出來
 なくなりました。

その時、不意といふ考へが浮びました。その考へでなら、
 まだ自分の一命は助るかも知れないと思ひました。チュエ
 ノは母親から、狼は自分の背後を見たいと思つても、そつ

ちへ背中を曲げる事も、首を向ける事も出來ないものだ
 と話に聞いたのを思出したのです。そこで、敏捷くツイと腕
 を伸し狼の尻尾を掴むが早いから、ぐいと、自分の方へひ
 つぱりました。

それからチュエノは、樹の洞をとび出して、自分の家の
 方へ狼をぐい／＼ひつぱつて行きました。

「お母さん！ お母さん！ いつも、僕の事をのろまだから
 狼の尻尾をつかまへて生け捕る事は出來ないと言つたね
 さアご覧よ。」と、チュエノは、大威張りでどなりました。

「ホーツ、不思議な事もあればあるものだね。」と、お人好
 のお母さんはいひましたが、怖がつて傍へもよりつかずに
 「チュエノや、お前本當に捕まへたんだね、それでは狼を
 何か巧い事に使つてやらうぢやないか。そつだ、この間死
 んだ羊の皮があつたね。あれを箱から出してお出で。それ
 を狼に被せて縫ひつけてやるんだから。きつと、すばらし
 い羊が出来るよ。それから明日は、市へつれて行つて、賣
 りとばして了はう。」と、いひました。

狼は狡猾で、利口な獸です。だから、今の話がわかつた

に違ひありません。しかしわかつた様な顔をしてはいけな
いと思つて、自分の身體へ羊の毛皮が纏ひつけられても黙
つてゐました。

「逃げようと思へば、いつだつて逃げられるのだ。急ぐ事
はない。」そう思つて、狼は角のついた重い毛皮を頭の上へ
のせられても、ちつと辛抱してゐました。しかし、暑くは
あるし、氣持ちが悪いので、時々咬みついてやりた
い氣がしましたが、それでもちつと我慢して了ひました。

三

翌日、チユエノが羊の皮を着せた狼をつれて市へ行つた
時、丁度市は真盛りでした。そこにあるたお百姓はみんな、
チユエノの周圍に集つて羊を見ました。めい／＼後から後
から高い値をつけました。お百姓たちはこれまでに、これ
程立派な羊を見た事はないと話合ひました。そこで幾度
となく、値がつけられた後で、とう／＼大層よい値段で三
人兄弟のお百姓の手へ渡りました。

さて、この三人のお百姓は、何れも澤山の羊を飼つてゐ
ましたが、今買った羊程、大きくて、綺麗なものはほなほ
「こいつは、いつかり弟の悪戯に違ひない、よし、明日
は敵打ちをしてやるぞ。」と思込んで了ひました。

そこでお百姓は、狼をひつばつて次の弟の處へ行きました
た。そして、本當の事は何にも話さず、この羊はどつちも、
うちの牧場の草を食はないから、お前の處へ置いた方がよ
からう。お前の處の牧場は、川の縁だしするから、其處の
草ならきつと食べるだらう、と言ひました。

そこで何も知らない弟のお百姓は、その晩、澤山の羊が
ゐる牧場へ狼を放しました。
翌朝になつて見ると、羊は同じやうに皆な殺されてゐま
した。處が、このお百姓も癩癩を起して、末の弟も自分と
同じ破目になれと思つて、狼をつれて行きました。

其後、三人は集つて、お互ひの不幸を白状しあひました。
それから三人は直ぐ様狼をひつばつて行つて、チユエノの
奴をひどい目にあはしてやらうといふ事になりました。

四

チユエノは、隣の家の杏の木に上つて、一生懸命赤く熟

のですから、大喜びで歸つて行きました。

途中まで来ると、一番年上のお百姓が、

「私の家が一番近いから、この羊を私が預つて、今夜はう
ちの欄の中で宿らせよう。そうして、明日になつてから、
誰の牧場が一番この羊の性にあつてゐるか、決める事にし
やうぢやないか。」と、いひました。狼は話をきくと、クス
ツと笑つて嬉しそうに前よりもぐつと頭を高くあげました。

翌朝はやく、總領のお百姓は羊のゐる欄を見廻りに行き
ましたが、思はずたまけました。

羊は残らず殺されてゐます。その内の一疋などは、狼が
食べて了つたと見えて、骨と皮だけになつてゐました。

お百姓はすぐと、その譯を知りました。隅の方に賊張
つて、寝たふりをしてゐるのは羊ぢやない、羊ならもつと
樂に背中や首を曲けられる筈だ、と思ひました。

「おやく／＼目を細くして、俺の様子を窺つてゐるな、ぐず
ぐずしてゐると、飛びつかれるぞ。」かう思つてお百姓は、
わざと知らん顔を装つてゐましたが、しかし口惜しくつて
口惜しくつてなりません。

した實を食べてゐました。すると三人のお百姓がやつて来
たものですから、あはて、樹からとび下りて、家へ駈けこ
みました。そして、ハア／＼いひながら、

「お母さん、お母さん、百姓達が狼をつれてやつて来た
よ。もうすつかり知れて了つたのだ。僕は殺されるに違ひ
ない。お母さんだつてそうだ。でも、お母さんが、僕のい
ふ通りにすれば、きつと二人の命は助かるよ。だからお母
さんはこの床の上に倒れて死んだ真似をしておるよ。そ
うして、どんな事があつても口をきいちゃいけないよ。」
と、かういひました。

三人のお百姓は、手に手に棍棒を持つてドカ／＼と入つ
て来ました。と、一人の女が床の上にぶつ倒れてゐるのを
見ました。その傍では、チユエノが跪いて、女の耳へピー
ピー呼子を吹き込んでゐました。

「ヤイ、何をしてゐるんだい。」と、總領のお百姓がいひま
した。

「何をしてゐるのかつて、私は世界中で一番みじめな人間
になつて了つたのです。親身のお母さんに死なれたので、



した。
「だが、何んだつて、そんなに呼子をビィ〜吹いてゐるのだい。」
と、お百姓が聞きました。

「今はこれだけが頼みなんです。この呼子は死人を生き返らせるので、名高いのです。それで私も、どうにかなるかと思つて——」と、言つてチユエノは、また顔へ両手をあてましたが、指の間から覗いて見ると、兄弟のお百姓たちは、六つの目を皿のやうにして、ギョロ〜見てゐます。そこで、チユエノはこゝだとはかりふいに、大聲を出しました。
「ご覽なさい、ご覽なさい。確かに、お母さんが身體を動かしましたよ。鼻の孔がビク〜動いてます。あゝ、この呼子には未だ偉い力があつたんだ！……」

かう叫んだかと思ふと、また身をかがめて前よりも、もつと〜はげしく呼子をビィ〜ビィ〜鳴らした。その内に女は手足をそろ〜と動かしてはじめて、

どうしていゝか解らなくなつてゐるんです。」
かういつて、チユエノは手を腕にあて、おい〜泣きま

なく頭を擧げて起き上りました。

お百姓たちは、死人が生き返つたので、びつくりして、暫くの間は口もきけませんでした。やがての事、總領のお百姓が、

「貴様は、なかく隅に置けない奴だ。この間は狼を羊だといつて俺達をだましたから、今日はその恨みを晴しに来たのだ。だが、その呼子をくれれば、勘辨してやらう。」といひました。

しかし、チユエノはわざとちぢ〜として、

「これは私のたつた一つの寶です。これで私はお金もつけをしてゐたのです。ですが、どうしても、それをよこせと仰るなら、仕方がないから上げます。」といつて、呼子を出しました。

五

兄弟のお百姓たちは、尊い呼子を手に入れたので、大喜びで家へ歸りましたが、途中で、一番末の弟がこんな事をいひ出しました。

「いゝ事を考へついた。皆のおかみさんは何れも忘れ者で

ぶり〜不平ばかり言つて仕方がない。一つ見せしめの爲め、家へ歸つたら殺して了はうぢやないか。そうして後で生き返らせれば、同じ事だ。」と、かう言ひました。

「あゝ、それはいゝ事だ。そんないゝ考へは外にない。」と外の二人も賛成しました。そこで三人の兄弟は、大喜びでめい〜自分のおかみさんを棍棒でなぐりました。おかみさん達は、その場に倒れて死んで了ひました。

それから兄弟は、代りあつて一生けんめい呼子を吹きました。胸が張り裂ける程にも吹きましたが、おかみさん達は、皺張つてゐる眼蓋一つ動かしません。ご亭主たちは、眞青になつて了ひました。こんな事は夢にも思はなかつた事だし、ひどい目にあはせる積りもなかつたのですから。三人のお百姓はやゝ暫くそうしてゐましたが、いくらやつても無駄なので、またも少年にだまされた事に氣がつきました。

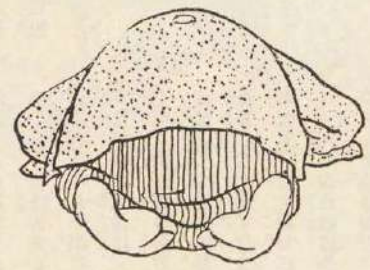
そこで三人は、魔のやうな怖ろしい顔をして立上り、今度は大きな袋をかついで、チユエノの家へ押かけて行きました。(つゞく)



二

頓平一向平氣で、早速家へ歸て大釜にお茶を一杯沸かして、町中をお茶の好きな仁はお出でなさいとふれ歩きましたので、澤山な人が集まつて來ました。

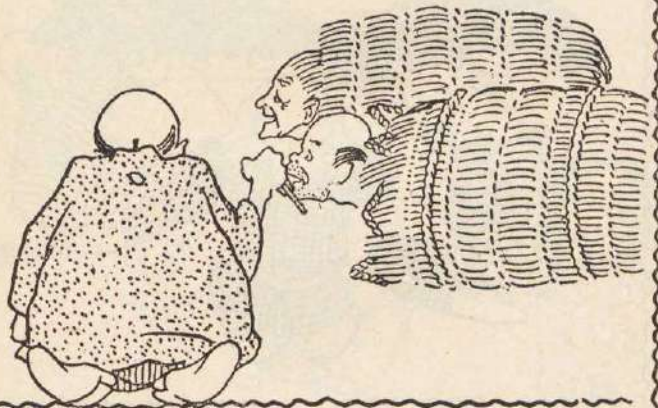
「この中で一番澤山召し上げた仁にはお殿様から御褒美が出ます」と申しましたので、皆は我れがちに一生懸命にのみ初めました。



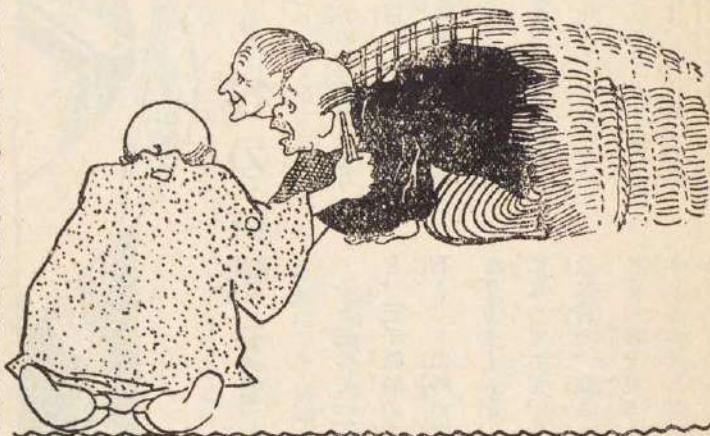
一

ふし頓智の頓平

ある町に大變頓智のある頓平と云ふ人がゐました。その噂が何日かお殿様の御耳に入りましたので、一つ試してやらうと、ある日頓平に「明日の正午までに御茶の實を二俵持て來い」と、いくら探したつてとても見附からない時分でしたので、こゝろ難題をお出しになりました。



三
 翌日頓平は「お申しつけの品ものを持って参りました」と申し出ました。
 殿様が御覧になると成程大きな俵が二俵ありますが、中から人の首がひよつこと出てゐます。思はずふきだし相になりましたが、
 「こりや頓平、これは人間じやないか、人を馬鹿にする」と承知しないぞ」
 「ハイ、これは立派なお茶のみで、爺は四升と八合、婆は三升のみます、ハイ」



四
 「予が申したのは人間じやない、地面に生へる御茶の實のことだ」
 「ハイ、地面にはへます」
 「もし、生へなかつたら命はないぞ」
 「かしこまりました、これ爺さん、婆さん、お殿様のお許しだ、はつて見ろ」
 二人はおつかかなびつくり俵からはひ出しました。
 「この通り地面にはへます」殿様も頓平の頓智に感心して、皆に澤山御褒美をやりました。





一ノ谷の合戦

(歴史真話)

窪田 空穂

義経は先づ、下りようとする谷の様子を見ようと思つて、馬を少しばかり追ひ落しました。或馬は餘りに急なので歩けずに轉び落ちてしまひ、或馬は足を折つて死んでしまつたが、その中の三匹だけは無事に下りて、谷の下にある能登守教経の陣の前へ立ちました。

それを見ると義経は、
「持主がめい／＼で氣を附ければ、馬は何うやら大抵夫らしい。さあ下りろ。義経を手本にしろ。」

ない。もう何うすることもできなかつたからです。

すると三浦義連が進み出て云ひますには、

「これ位の所が何だ。我々三浦の方では、鳥一羽獲るにも、これ位の所は駆けまはつてゐます。これ位の所は、三浦の方では馬場にしてゐます。」

さう云つて義連は真先にその崖を下り始めました。それに勵まされて、外の者も續いて下りました。後から下りる者の顔は、先へ下りる者の裾へさはる程でした。眼を開いてゐるとうるさいので、皆眼を閉いで下りました。その中でも馬に力を附ける爲に忍び聲で聲を懸け通しました。

三千餘騎の者が、下りきると一しよに関の聲をあげました。その聲は山彦とまじつて、十萬騎も

の聲のやうに聞えました。
村上康國の軍勢は、直ぐに平家の城へ火をつけました。

そう云つて三十騎ばかりが先へ立つて下りると、三千餘騎の者が續いて下りました。そこは小石まじりの砂の崖だつたので、二町ほどはすべて下りましたが、下りて見ると、そこは壇のやうになつてゐて、そして其下は、削り取つたやうな急な岩で、高さも十四五丈もありました。

その崖を見ると、さすがの武士も暫くはぼんやりしてゐました。そこは、とても下りられさうにない。それかと云つて、今は明返すこともでき

不意に、思ひ懸けなかつた鶴感の方から関の聲のあがつたので、驚いたり慌てたりした平家の軍勢は、續いて、城から黒煙が立ち、火の手があがつたので、益々驚き慌て、俄に崩れ立つて來ました。今まで何方が勝つか分らなかつた合戦は、明らかに平家の負になつて來ました。

十二

鳥か獸でなくては通ることのできない鶴越を、義経の三千餘騎が越して來て、一ノ谷の城へ火を附けて焼き拂つたのは、平家に取つては全く思ひもよらないことでした。平家はすつかり慌てゝしまひました。

平宗盛は、幼い安徳天皇をお連れまをして、燃え移つて來る火の中を脱れました。そして、さういふ場合の爲にと、前から用意してあつた船にお

乗せまをして、海の上へ脱れました。

城がなくなり、天皇がお逃げになつてしまつたあとの平家の軍勢は、總くづれとなつてしまつて、我れがちに逃げ出しました。しかし、山を後ろにし海を前にした守りやすかつた場所は、逃げるとなると、極めて逃げるににくい場所となりました。逃げられる方は海の上か、又は敵の軍勢の割合に少い搦手（裏手）の方より外はありませんでした。

誰も第一に覗つたのは、海の上でした。そこには船が澤山ありました。しかし皆慌てきつてしまつてゐるので、一般の船に五百人も千人も乗りました。鎧を着た重い人がそんなに乗つたので、せつかく漕ぎ出しはしたが、肝腎の船の方が堪らなくなつて、見る間に三艘までも沈んでしまひました。それを見た平家の方では、これからは立派な武士の外は乗せまいとして、戦い身分の者は、船

の下に、弟の教經、盛俊などいふ強い者が随つてゐました。教經（能登守）はいつた戦にもきつと勝つた程の強い人でしたが、その時だけは何う思つたのか、踏みとどまつて戦はうとはしらずに、馬を走らせて西の方（搦手）を指して落ちて行きました。そして播磨の高砂まで行つて、そこから船で、讃岐の八島へ渡つてしまひました。

盛俊は、今は逃げても逃げきれないと思つたのか、馬を一つ所に立てて、敵の来るのを待ちうけてゐました。

それを見つけて、好い敵がゐると思つて馬を駆けさせて寄つて来たのは猪股則綱です。則綱は双方の馬が並ぶと見ると、盛俊に組みつきました。そして二人は地響を立てて馬から落ちました。

則綱は關東でも評判な力持で、鹿の角の本の方の枝を手で裂くほどの力がありました。盛俊の方

にすがりつく手や腕を刀で切り拂つてしまひました。それでも何うかして乗らうとする者が多いので、濱邊は、さうした者の血で真紅になつてしまひました。

かうして平家の軍勢の慌てゝゐる中を、源氏の軍勢は、手柄の爲場所だと思つて、勢ひ込んで戦ひ廻つてゐます。

山の手（搦手）の大



はそれよりも元らく、十六七人も懸つて海から押上げたり押し下したりする大きな船を、一人で自由にする程の力がありました。それで馬から落ちた時には、盛俊は上になつて、則綱をしつかりと壓へつけてしまつてゐました。

則綱は、下から刺し殺してやらうと思つたが、餘り強く壓へられてゐるので、手の指が利かなくなつてしまひました。それどころで



はない、聲まで出ませんでした。それでも息を繼いで云ひました。

「敵の首を取るには、自分で名のりをし、敵にも名のらせて取るものだ。名も分らない者の首を取つたからとて爲方がないでせう。」

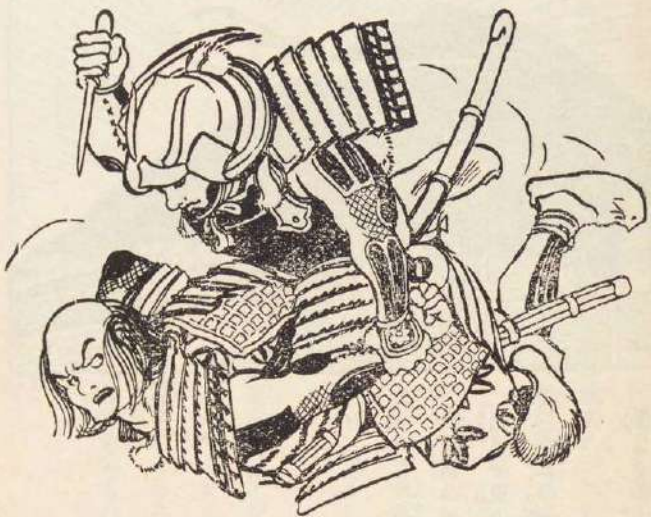
「以前は平家の一門だつたが、今はただの侍となつてゐる越中前司盛俊といふ者だ。あなたは何といふ者だ。名のりをしろ。聞かう。」

「私は武藏の猪股則綱といふ者です。こゝはお助け下さい。その代りには、私の今度の手柄の褒美に、あなた方の命乞ひは致しますから。」

さういふと盛俊は、かつと怒り出しました。

「盛俊はつまらぬ者ではあるが、それでも平家の一門だ。源氏を頼まうなどとは思ひも寄らん。源氏もまた盛俊に頼まれようとは思ふまい。憎い言ひ分をする男だ。」

盛俊は、初めの中は、二人の敵を一目づつ見てゐたが、その中に、次第に近づいて来る敵の方を



さう云つて今にも首を取らうとすると、則綱は、「それは卑怯です。降参した者の首を取るといふことがあるのですか。」といふと、「それもさうだ。」と云つて、盛俊は相手をゆるしてしまひました。二人は起きあがつて、そこにある田の畦へ腰をかけて息を繼ぎました。その田は、前の方は堅い田だつたが、後の方が泥田でした。暫く休んでゐると、向うから、馬を駆せさせて一人の武者が来ました。盛俊は油断のならない眼をしてそれを見ました。則綱はその様子を見て、

「あれは手前の懸意にしてゐる人見四郎といふ者です。手前のゐるのを見つけて来たのでせう。お氣づかひはいりません。」

さう云ひながらも則綱は、人見が近づいたら今一度組んでやらう、まさか助大刀をしないことはなからうと思つて、近寄るのを待つてゐました。

ちつと見て、ちよつとの間則綱を見ませんでした。その隙に則綱は起ちあがつて、拳固で、盛俊の胸を突きました。不意なので盛俊はあふ向きに倒れたが、起きあがらうとする所を、則綱は馬乗りになつて、盛俊の刀を抜いて三刀まで刺しとほして、たうとう首を取つてしまひました。

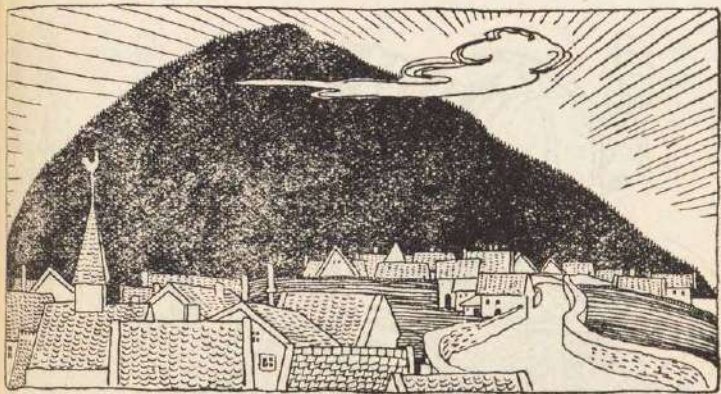
又、搦手の大將軍であつた通盛は、軍勢はちりちりになつて了ふ、弟の教經には後れて了つて、そして後を追はうとした時には、敵の軍勢に遮られて了つて、それも出来なくなつて了ひました。

「場所を見つけて自害しよう。」

さう思つて、大手の方へ向つて行くと、佐々木業綱、玉井助景などいふ敵の七騎ばかりに出逢つて、取圍まれて了ひました。その時まで侍が一人だけ附いてゐたが、それも何所かへ逃げて了つてたゞ一騎で打ち取られて了ひました。(つゞく)

聖者と狼

横山 壽 篤



今からざつと七百年も前の話……
伊太利のグビオの町は、大きな山の麓にありました。
朝日が東の空を紅く染めると、直ぐグビオの町の後の山の縁は、
美しい日の光にかざやいて、グビオの町を祝福するやうに見えまし
た。

併しその山は、木が繁つてゐるだけに、種々の獣が住んでゐまし
たが、中にも性のよくない狼がゐて、夜になると、町へノノノノ出
て来て家畜を襲つて喰べました。そこで町の人々は、狼に家畜を襲

られないやうに、注意するやうになりました。す
ると、家畜を奪ふことの出来なくなつた狼は、今
度は殆ど毎夜のやうに人をさらつて行きました。
昨夜は彼の人にとられた。一昨夜は彼の人が行衛
不明になつたと云ふ恐しい話が、町中に繰返され
るやうになりました。

そこで町の人々は、毎日狼退治の相談をしまし
た。けれども誰一人として、自分が先に立つて狼
退治に行かうと云ひ出すものがありませんでし
た。

ある日のこと、フランシスといふ聖者が、アシ
ージと云ふ町からこゝへ参りました。フランシス
は神につかへて、人々に神の教へを説きすゝめる
人の内でも、尊い賢人として、みんなに崇められ
てゐました。

そのフランシスの姿を見た町の人々は、

今からざつと七百年も前の話……

伊太利のグビオの町は、大きな山の麓にありました。

朝日が東の空を紅く染めると、直ぐグビオの町の後の山の縁は、

美しい日の光にかざやいて、グビオの町を祝福するやうに見えまし

た。

併しその山は、木が繁つてゐるだけに、種々の獣が住んでゐまし

たが、中にも性のよくない狼がゐて、夜になると、町へノノノノ出

て来て家畜を襲つて喰べました。そこで町の人々は、狼に家畜を襲

「あゝ、フランシス様だ、尊いフランシス様だ、

フランシス様なら、何でもお出来になる、狼退治

はフランシス様にお願ひしようではないか。」

「それが好い、それは好い事に気がついた。」

と、皆口々にいひました。

「おゝ、私のフランシス様」と、一人が聲を掛け

ました。

「尊いフランシス様、一寸お待ち下さりませ。」と、

一人が呼びとめました。

「有り難いフランシス様、お願ひがござります。」と、

一人がいひました。

フランシスが道を歩いてゐると、一日に何度も

こんなことがありました。「私の子供が死にかけて

居ります、どうぞお助け下さりませ。」とか「私の

目は生れた時から見えません、どうぞ此目を開け

て下さりませ、フランシス様のお姿を拜めるやう

にして下さりませ。」と、云ふものもありました。ですからフランシスは少しも驚きませんでした。

フランシスは静かに立ち止つて、その人々を見ました。人々はフランシスの前に蹲きました。

「フランシス様、よい處へお出で下さりました。お聞き及びでも御座りませうが、此町の山に悪い狼が居ります。町のものどもは安らかに眠ることが出来ないで御座ります。」

「初めの内は家畜を奪られる位のこと御座りましたが、この頃では人を凌つて行くやうになりました。」

「私の叔母が、前の金曜日の夜、行衛不明になりました。」

「私は、友達達の晩餐會からの歸り途中で、その狼に追つかげられました。危い命拾ひを致しました。」と、彼ら一々訴へました。

「御で打ち斬つて下さりませ、御み足で蹴殺して下さいませ。」

「あなた様の御眼力で、睨み殺して下さいませ。」

フランシスは暫く黙つてゐましたが、

「それは私には出来ぬ、無理な願ひぢや。」と、い

黙つて聞いてゐたフランシスは、

「それで、私にどうせよと仰るのぢや。」と、云ひました。

「フランシス様、尊いフランシス様、あなた様は何でもお出来で御座ります、あなた様は困つてゐるものを、いつでもお助け下さります。どうぞ私どもをお助け下さりませ。」

「町のもの全體のお願ひで御座ります、町のもの皆あなた様を崇めて居ります。」

「私どもの力の及ばぬことも、あなた様にだけは爲し遂げられます、どうぞお願ひでござります、お助け下さりませ。」

フランシスは再び、

「それで私にどうせよと仰るのぢや。」と、いひました。

「どうぞ、その狼を退治して下さいませ。」

ひきりました。

「いえ、フランシス様、あなた様にそれが出来ぬことは御座りません、あなた様より他に、この狼を退治すること出来るものは一人もゐないので御座ります、どうぞ、然う仰らずに御引受け



下さりませ。」

「私のフランシス様、町のものみんなのフランシス様、あなた様は、この町の救ひ主でゐらつしやりまする、どうぞ狼を退治して下さいませ。」

フランシスは

「私にはその力がない。それは無理な願ひぢや。と、いひました。」

「フランシス様、それではあなた様は、此町のものゝ、困難を御同情下さりませんで御座りまするか。」

「私をお憐み下さりませ、私の兄弟をお憐み下さりませ、この町のもの全體に、憐みをお掛け下さりませ。どうぞ狼を殺して下さいませ。」

フランシスは決心したやうに、

「どのやうに云はれても、私にはその力がない、私には出来ぬことぢや。いかやうに悪い狼でも、

ふれませんでした。」

フランシスは、刀も棒切も何にも持たずに、恐しい狼の住んでゐる山へ、そろ／＼と登りました。町の人達の中でも勇氣のあるものは、劍や槍をも



それを殺すことは、私には出来ぬ。併し、あなた達も氣の毒ぢや、兎に角狼に逢つて見よう。」と、いひました。

「あゝ、お聞き届け下されましたか、有り難や、有り難や、さあ、みんなお禮を申し上げよう。」

「有り難う御座りまする、有り難う御座りまする。」

「それではこの劍を持つてお出で下さりませ。」と、一人の男が刀を、フランシスに渡さうとしました。

「いや、刀はいらぬ。」と、フランシスは、その刀に見向きもしませんでした。

「でも御座りませうが、萬一の要心にこれだけはお持ちなさりませ。」と、フランシスの身の上を氣づかうて、重ねて進めました。

「いや、刀はいらぬ。」と、フランシスは矢張り手もつて、フランシスとは遙か離れて、ついで登りました。繁り重なつた木の爲に、目の目も見えぬ位暗い谷間にも、可憐な花が咲いてゐました。何處から落ちてくるとも知れぬ細い流れは、靜かな囁きを、人々の耳に傳へました。

フランシスは、成るべく狼の住んでゐる山へ、林と分け入りました。暫くすると、たしかに狼の遠吠えらしい物凄しい聲が、二度三度聞えました。刀や槍を持つた町の人々の顔色は蒼白になりました。すん／＼ついて来てゐた足が俄に前へ進まなくなりました。けれどもフランシスはそれと

反對に、迷子になつた人を探ね當てたやうに喜びました。そして、

「みなさん、御苦勞々々。もう是れから先は私一人で進ませう、皆さんは休んでゐて下され。」と、いひました。

すると、遙か彼方の大木の裂け目から、キラツと光つたものがありました。それは狼の兩眼でした。狼は大木の側の岩の上へ飛び上つて、フランシスの方をきつと睨みました。町



の人々はみんなそこへ、へたばつてしまひました。狼は一聲高く吠えて、其岩から飛びおり、嵐のやうな勢で、フランシス目掛けて駆けて來ました。フランシスは靜かに立つたまゝ、身構へも何にもしませんでした。

二

狼は牙を鳴して木の根を跳ね越え、草を踏みしだいて、一散に近いて來ました。フランシスは丁度折れた大木の幹のみが立つてゐるやうに、ヒョロリと立つてゐました。狼はフランシスの足許から、一間ばかり離れた木の根に前足を掛けて、今しもフランシスに飛びかゝらうと身構へしました。その物凄さつたらありませんでした。

フランシスは心から笑顔をつくつて、「おゝ、兄弟よ、私は君に逢つて話したいことがあつたのでお訪ねしました。」と、狼にいひました。

併し狼は、ちつとも油断をせず、姿勢も崩さずに、素破と云へば飛掛らうとしてゐました。

「兄弟よ、まあ靜かに、靜かに。私が今日君をお訪ねしたのは他でもない、君と町の人とは大分仲が悪いやうぢやが、今日から仲なほりをして貰ひたいと思つて來ました。」狼はその言葉が解つたのかどうか、今まで開いてゐた口を閉ぢて、牙をかくしました。

「兄弟よ、君は町の人達から大層にくまれてゐる、誰でも憎しみを受けると云ふことは、よくないことぢや。君が、今後町の人を苦しめないと云ふことを、約束してくれるなら、私も、君に喰べものゝ不自由をさせぬ



と云ふ約束をしたいと思ふ。君が町の人を苦しめるのも、つまりは喰べものがないからだらうと思ふ。ねえ、兄弟、この約束をしてくれぬかの。」狼の姿勢は次第に崩れて、その眼光さへ優しくなりました。

「其約束をしてくれるなら、其證據に握手をしよう。」と、云つてフランシスは狼の目の前へ手を差しのべました。すると狼は首をうなだれて、尾を

振りながら、フランシスの前へ進んで来ました。そして前足をあげて、フランシスに握らせました。「有り難う〜、兄弟よ、よく約束してくれました。」と、云つて狼の頭を撫でました。

どうなることかと、木蔭で此有様を見てゐた町の人々は、初めは驚いて、それから氣づかひましたが、終ひには安心して胸を撫で下しました。

「兄弟よ、それでは私と一緒に町へ行つて下さい、そして町の人と仲なほりをしてもらひたいのぢや、さあ町へ行かう。」と、フランシスは先に立つて山を下りました。狼はのそり〜と、その後をついて来るのでした。

フランシスと狼は、やがて町に着きました。此事を聞きつたへた、町の人々は、狼を見ようと思つて寄つて来ました。フランシスは大きな石の上に上りました。狼も

ピヨコンと飛び上りました。その石の周囲は、町の人で一ぱいになりました。

「皆さん、どうぞお静かに聞いて下さい。」と、フランシスは、がや〜云つてゐる人々を静めました。

「兄弟よ、よく一緒に来てくれました。さつき山で私に約束してくれたことを、こゝで——町の人々の前で、もう一度約束してもらひたいのぢや。」と、狼に云つて、今度は集つてゐる人々に向けて、

「皆さん、私は此狼と約束をして来ました。それは今後諸君に害を加へない代りに、狼に御馳走をしてやると云ふことなのです。諸君もそれだけの約束をして下さるぢやらうの。」と、云ひました。

「お、フランシス様、フランシス様の前で其約束をしたうござります。」と、人々は申しました。そこでフランシスは、狼に云ひました。

「兄弟よ、約束して下さい、君さへ約束を破らへない

なら、町の人々は決して約束を破るやうなことはないであらう。さあ、それでは町の人々の前で其

約束のしるしに、も一度握手しよう。」

狼は前足を出しました。フランシスはそれを握りました。人々は喜びの聲を一齊に挙げました。



かうして、狼は山から町へ出て来て、フランシスと町の人々とに約束した通り、それからは鶏一羽だつて、奪つて食べるやうなことはしませんでした。そこで町の人々から愛されて、一生ズビオの町で御馳走を食べて過しました。(をほり)

支那のイソツプ

楠山正雄

(三) 三匹の虱

猪の體についた三匹の虱が、てん／＼血の多い甘さうな所を争つて喧嘩をしてゐるのを、年寄の虱が見て笑ひながらかういひました。

『もうちき冬になつて山の茅葺の枯れる時分になると、この猪は人間に焼き殺されて食べられてしまふのだ。何でもいゝから食べるのは今の中だよ。』

虱共はそこで慌てゝ一緒になつて所かまはず猪の體を食べはしめました。おかげで猪はすつかり瘦せて、冬になつても焼き殺されずすみしました。



(四) 鴨と蛤

蛤が砂の上で大きな蓋をあけて、いゝ心持さうに日なたぼっこをしてゐますと、水鳥の鴨が餌をあさりに来て、長い嘴で蛤の身を啄いて食べようとしました。蛤はびつ



しつかり蓋をしめてしまひました。『今日も降らない、明日も降らない、水ふだらう。』と鴨はいひました。

『今日も離さない、明日も離さない、嘴をはさまれて息がつまつて、鴨は死んでしまふだらう。』と蛤はいひました。鴨は蛤の身をはさんだまゝ、蛤は鴨の嘴をくはへたまゝ、いつまでも強情にのほせ上がつて喧嘩をしてゐました。そこへ漁師が通りかゝつて、鴨も蛤も捕へて食べてしまひました。『鴨と蛤の争ひが、よその漁師の儲けになる』といふはこれです。

*くりして鴨の嘴をくはへたまゝ、

がなくなつて、ひからびて、蛤は死んでしま

鼻を取りにやつた王様の話

野島辰二



むかし或る國に、たいそう強い、戦の上手な王様がゐました。或る年の春、この王様と隣りの國と戦争最中の事でした。恰度國境の戰場では、敵味方の軍勢が互に入り亂れて、毎日々々激しく戦つてゐましたが、この王様の軍勢は、中々勝ちを

は、まるで勝ち誇つたやうな氣持になつて、ずん／＼その敵軍を追ふことにしました。

その時、王様は或る一人の大將に向つて、

「お前はこれからこの先の町へ行つて、町の者の鼻をみんなそぎ取つてしまへ。そして、それがすんだら、ずん／＼進め。」

と、かういふ命令を下しました。

この命令を受けた一人の大將は、如何に王様のお言ひ付けでも、これは少し亂暴過ぎることだと思ひました。兵隊が兵隊と戦ふのは當り前かも知れませんが、別に罪も科もない町の人達の鼻を、片つ端からそぎ取るなど、云ふのは、どう考へて見ても、少し無理なことだと思ひましたが、何しろ恐ろしい王様の命令ですから爲すがありませぬ。多勢の部下を引き連れて、早速その町へ進んで行くことにしました。

占めるわけには行きませんでした。で、終には王様も氣が氣でなくなりましたので、一寸した事にも直ぐ腹を立てるやうになりました。が、やがて隣りの國の軍勢は、何を思つたのか、にはかに國の中へ遠く退却をせよしてしまひました。そこで王様

その町では、早くもこの噂を傳へ聞いてしまひました。

町の入口のところには、高い一本の柱が立つてゐて、その柱の上には、大きな鐘が吊してあけました。町の人達はみんな心配さうな顔をして、入れ代り立ち代り、下から綱を引つ張つては、この鐘をが／＼／＼ならしました。男も女も、年寄りも子供も、この鐘の音を聞いた町の人達は、急いでこの入口の鐘の柱の下に集まつて來ました。入口の廣場は、たちまちの裡に、町の人達で、ごつた返すほど、いつばいになつてしまひました。

わい／＼、わい／＼と、てんでに騒いでゐる町の人達の顔は、どれもこれも悲しさに曇つて見えました。それもその筈ではありませんか、やがて恐ろしい王様の部下が攻めて來て、自分達の鼻をそぎ取つてしまはうと云ふのですから。さうし

て、自分達を今まで守つてゐて呉れた自分達の國の軍隊は、すつと後ろの方へ退却してしまつたのですから。鼻を斬られたら、町の人達はみんな死んでしまはなければなりません。たとへ死んでしまはないまでも、顔の真ん中に急に穴が二つ出来て、お互に二度とは見られない醜い人間になつてしまふでせう。さう思ふと、悲しくなつて来て、町の人達は手の平で鼻を大切さうにおさへながら、泣いたりわめいたりしました。

かうした騒ぎなので、町の人達は集まるには集まりましても、どうすればこの恐ろしい敵を防ぐことが出来るか、など云ふ肝腎なことがらを相談しやうとはしませんでした。いや實はもう恐ろしさに心がわく／＼震へてしまつてゐるので、そんなことを落着いて考へたりなどしてはゐられなかつたのでせう。

の部下を引き連れて、町の入口へやつて來ました。大將は、この町の様子を知らないのです、先づ入口の廣場に陣取つて、こゝで王様からの命令を行ふことにしました。つまりこゝに見張つてゐて往來を通る町の人達の鼻を、片の端からそぎ取つてや

その内に、一人の小男が、まるで猿のやうな恰好で、その鐘の柱によち登りました。この小男はこの町でパン屋を商賣にしてゐたのですが、いつもにこ／＼してゐると、誰にも親切なので、みんなからたいさう可愛がられてゐました。柱の中間まで登つた時、その小男は左の手でしつかり柱を抱へ、右手を振りながら、町の人達に向つて、相變らずにこ／＼した顔を元氣よく輝かしながら、何かしきりにしやべり出しました。すると、やがてこの小男が、する／＼と柱から降りると同時に、そこに集まつた多勢の人達は、ほつと安心したやうな顔をしながら、それ／＼自分達の家へ歸つて行きました。その廣場は、またもとのやうに、ひっそりしてしまひました。

しばらくすると、進軍喇叭の音も勇ましく、鼻をそぎ取れといふ命令を受けたその大將が、多勢

らうと云ふたくらみなのです。そこでその大將は部下をそれ／＼手分けて、自分は鐘の柱の下に立つて見張つてゐました。

まだお晝を少し過ぎたばかりでしたが、大將の目には町の様子が、たいさう静かに見えました。



人の話し聲さへ聞えませんでした。ですから、その廣場を通る人などは、一人もありませんでした。その内に、その大將はうとくと睡くなつて來ましたので、柱の下の捨石に腰をかけ、休むともなくくぐりくぐりとぬねむりを始めました。

「こらッ、待て。お前はこの町の奴か、少し用があるからこつちへ來い」

かう云ふ番兵の叫び聲に、大將はびつくりして目を覺めました。さうしてそこにきよとんと突つ立つてゐる一人の男を見て、思はず笑ひ出しました。二十三四になる鼻の高いその男は、泥だらけの長靴と、よく光つてゐる短い靴とを、片ちんばに穿いてゐるのです。

「おい、お前はなんだつてそんな靴の穿き方をしてゐるんだ。」
と、大將が不思議に思つて、かうきいて見まし

た。すると、

「え、雨の日には長靴、お天氣の好い日には短い靴を穿きます。ところが今日は、ちとお天氣様があぶなうございますからな」

と、その男はげらげら笑ひながら、かう答へました。大將は、この男は少し馬鹿だ、こんな男を相手にしても爲方がないと思ひました。そこで「あつちへ行け。」

と、云ひました。その男は、泥だらけな長靴を穿いた片つ方の足を、さも重たさうに引きづつて、あちらへ行つてしまひました。

「あの男の鼻はそぎ取らなくてもよろしいのですか。」

部下の一人が大將に訊きました。

「あいつは馬鹿だから、まあいい。」
と云つて、大將はまるで鼻のことなどは忘れ

やうな顔をしてゐました。

すると、こんどは十六七位の女の子が、一人しよんばりやつて來ました。

色の淺黒い、目元の可愛い子ですが、白い壺を右わきに抱へて、なにかひどく考へ込んでゐる様子でありました。

こんどは、大將が自分でこの女の子を呼び付けると同時に、こはい顔をしてにらみ付けました。

女の子はおづくくと大將の前へ出て行きました。が、やがて優しい聲で大將に向つて云ひました。



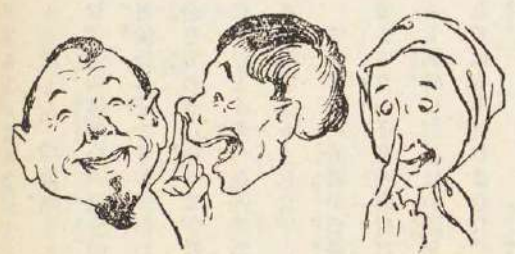
「あなたはえらい方なんぞせう、えゝきつとさうだわ、では私に是非教へて下さいな」
大將は少しまごつきました。

「なにを教へて呉れると云ふのだ。」

「え、有りがたう、私はね、これから牛のお乳をしぼつて來なければならぬのよ。ですけどね、

この白い壺には底ばかりあつて、入れるところがないのですもの。どうしてお乳を入れて來られるでせうか。」

かう云はれたので、大將は女の子のかへへてゐる白い壺を見ました。さうして思はず笑ひ出してしまひました。女の子はその壺を倒さまに持つてゐるからでした。が、女の子



は大將の笑ふのを、却つて不思議さうに見てゐました。大將はこの子は少し馬鹿だと思ひました。そこで

「お前のやうな馬鹿者に用はない、早く家へ歸れ。」と、どなりました。女の子は、すごくとあつへ行つてしまひました。

それから、しばらくの間はちつと見張りをしてゐましたが、大將の目にとまつたこの町の人は、どれもこれも、皆な少し馬鹿者のやうに見えました。で、大將も怒るにも怒られず、まるであきたやうな顔をして、一寸の間何が考へごとをしてゐましたが、やがて部下の者をそこに列べて「この町の奴等はみんな馬鹿者だ、我々はこんな馬鹿者の鼻をそぎ取る劍などは持つてゐない、だからこれから王様の陣屋へ引揚げやう。直ぐとその用意をしらう。」

と、命令しました。

さうして間もなく、大將を先頭に兵隊どもはもと來た方へ歸つて行きました。大將の銀の兜が、恰度その時西に傾いてゐた夕日に照り映えて、きら／＼まぶしく光りました。



此一隊の影が、遠くむかふの森の中に消えた時、今迄待兼ねてゐた小男は、いきなり綱を

たと云はん許に、町の入口の鐘の柱の下に跳出した一人の男がありました。其男は前に此鐘の柱によち登つて、町の人達に何か頻りに饒舌つてゐたバン屋の小男でありました。

引張つて、力の限りが／＼と鐘を打鳴しました。その鐘の音を聽いて、町の人達はまた前と同じやうに、しかしこんどはみんな鼻の頭をつまみながら、に／＼として集まつて來ました。男も女も年寄りも子供も、嬉しさうな顔をしてゐました。さつき敵の大將にうま／＼と馬鹿者だと思はせた長靴の男は、ちやんと立派な短い靴を光らせてゐました。白い壺の女の子も、ちやんと壺を持つて其の中には牛の乳をいっぱい入れてゐました。

町の人達は、お互の鼻がそぎ取られずに、もとのまゝにあるのを此上なく喜んだばかりでなく、何だか自分達の鼻が、前よりはいくらか高くなつたやうにさへ思へました。そこで、みんなは小男の智慧の偉い事に感心し乍ら、小男の廻りを取巻いて、手を叩きながら、唄を唱ひ出しました。小男はあまり高くもない鼻を、びく／＼と動かしました。(をばり)

蜜蜂の飼ひかた

初めて蜜蜂を飼つたおぢさん、蜂が止つても手で打たり拂たりしてはいけないと此の本に書いてあるよくおほえておけよ、と云つてる所へ後から、ぶん、と来て禿頭へ



不思議なお武士

吉田 六郎



お話しの方に、竹田源左衛門といふ不思議なお武士の事を書いて置きませう。この人は、駿河の三日月湖のあたり一面の土地を持つてゐた領主で、大そう武勇に優れたお武士でした。戦争に出ては一度だつて負けた事がなく、國內を治める事も巧くて、何事につけても正しいことばかりやつたので、その名は四方に響き渡つて居りました。

源左衛門には、一人の子息が居りました。もう立派なお武士になつてゐましたが、悪い家來にだまされて裏切を忍び、親の國をもちやうとしたので、源左衛門は太息をつて、とうとう三日月湖の中の離れ小島へ子息を押し込めて了ひました。

それからといふもの、流石の源左衛門も世の中をはめなく思つて、始終元氣なく日を送るやうになりました。

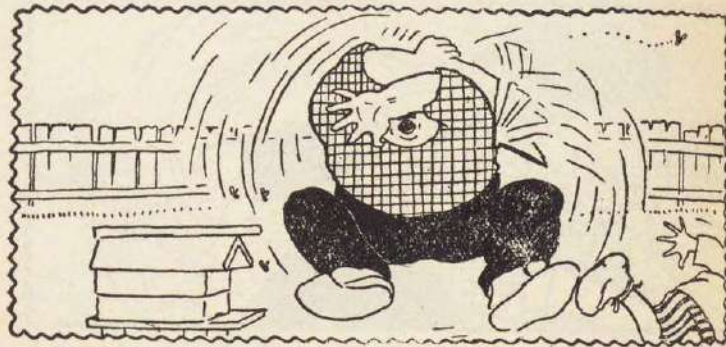
その後の或る日の事、源左衛門は傍についてゐる臣下たちに向つて、不思議な事をいひ出しました。

自分の子孫には、必ず不幸や禍が起つて、遂に一家が亡びて了ふのだといつて、その有様を手にとる様に細々と物語りました。さうして、言ひ終つたかと思ふと、すぐ様臣下にいひつけて、既から、平生可愛がつてゐる白馬を曳出させ、黄金の鞍を置いて、自分は鎧兜を身につけ、逃げるやうに屋敷を出て行きました。臣下たちはびつくりしてどんく後を追ひかけました。

白馬に跨つた源左衛門は、三日月湖の岸まで來ましたが、急に手綱をひいて、湖水の中へ馬を入れました。臣下達はよく驚いて、

「御殿様！ 御殿様！」

と、聲を限りに叫びましたが、源左衛門の耳には少しも響かない様に、平氣ですんすんと湖水の奥深くへ進んで行きます。臣下たちの中には身を躍らして湖の中へ飛込み、後を追つて引止めやうとした者もありましたが、その時はもう遅かつたのです。源左衛門は湖水の中程まで來てゐました。そして、振返つて臣下たちの方を眺め、別れを告げる様に手を高く舉げたかと思ふと、そのまゝ、水底へ姿を消して了ひました。





それから何十年かたちましたが、果せる哉、源左衛門のいつた通り、竹田家にはい
ろくの不幸や禍が起つて、とうく他國から入りこんで来た、名も知れない白川權
十郎といふ武士の爲めに、亡ぼされて了ひました。
處が、この白川權十郎といふ武士は、實に悪い男で、無法なことばかりやるので、
國中の人達が困りました。すると、その頃から不思議な噂が立つ様になりました。
毎年五月になつて、源左衛門が湖水へ身を沈めた日が来ると、夜明け頃に、必ず源
左衛門が昔の様に黄金の鞍を置いた白馬に跨り鎧兜を身につけて、もとの領地を見
廻りにやつて来る、——といふ噂が立つたのです。そして、その姿を見た人には、き
つと、仕合せがあるといふ事でした。それからまた、大勢の人が見た年は必ず豊年だ
といふ事になつてゐました。

竹田源左衛門のお話はこの位にして、これからいよく本筋のお話に入ります。

五月の麗らかな朝のことでした。三日月湖の岸に沿うた山中村に與七といふお百姓
が居ましたが、丁度その翌日は、領主の白川權十郎へ年貢の金をどうしても納めなけ
ればならないので、湖の岸へ来て考へ込んでゐました。

與七は學問もあり、親切な男なので村の人達から大層敬はれて居りましたが、丁度
その年は、穀物がよく出来なかつたので、お金に困つてゐたのです。しかし、領主の
白川權十郎が與七を可哀そうに思つて、納める日を延びてくれるといふ様な事のある
事はありません。ですから、與七は自分の領地をとり上げられては、翌日からは村

を追い出されて、平飼たちと一しよに乞食でもして歩かなければならないので、その事
を考へずには居られなかつてゐました。

五月の朝日は、湖水の岸をおだやかに照してゐます。しかし、與七にはちつとも氣
持ちがよくはありませんでした。

「明日からは乞食になるのだ。」かういつては、溜息ばかりついてゐました。すると、
背後の方で足音がしました。與七は、驚いて、誰か自分の獨言を聞いたのぢやないか
と思ひ、振り返つて見ますと、一人の立派なお武士が立つてゐました。

お武士は、やさしい聲で、

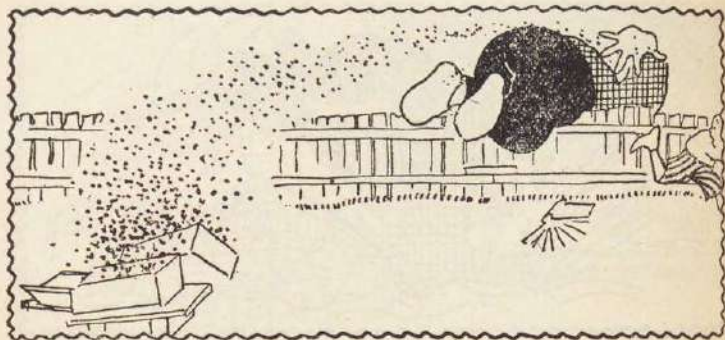
「與七、お前はなぜ、そんなに青い顔をしてゐるのか。」と、きゝました。

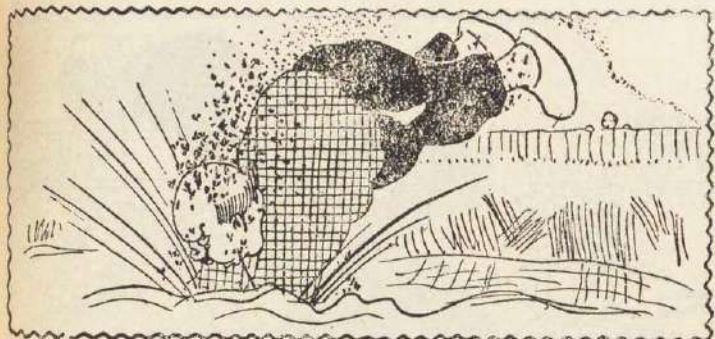
與七は思ひがけなくお武士の姿を見たので、びつくりして了ひましたが、しかしお
武士が、大層やさしい顔をしてゐるので、安心して、自分の困つてゐる譯を話しまし
た。その年は、穀物が不作で、殆ど收穫がなかつた事や、領主の白川權十郎が、慈け
用捨もない男で、翌日の夕刻までに年貢の金を納めなければ、村から追出されて了ふ
事などを細かに話しました。

「それは可哀そうな事だ。しかし、領主がお前の事情を知つたら、まさか村から追出
すといふ様な酷い事はしないだらう。」と、お武士がいひました。

「いゝえ、どういたしまして、白川様はそんな慈けのある方では御座いませぬ。許し
てなど下さるものですか。」

「さうか。」といつて、お武士はや、暫く考へてゐましたが「それなら、何れ何かで白





川をこらしてやるが、とりあへず、お前にやる物がある。かういつて、お武士は、傍に脱ぎ捨て、あつた奥七の頭巾の中へ、袋に入れた物を投入しました。

「それで、年貢を納めるがい。」

とお武士がいつたので、奥七が袋を開けて見ますと、澤山の小判でした。奥七は夢でも見てゐるのぢやないかと思つて、ほんやりと小判を眺めてゐましたが、その内にふと気がついて見ると、もうお武士の姿は見えません。ハテ何處へ行かれたのかと思つて、見廻しますと、たしかに今のお武士と思はれる人が白い馬に乗つて、湖の奥へ奥へと進んで行きます。奥七は初めて、今のお武士が昔、この湖へ沈んだと語りに聞いている、竹田源左衛門であつた事を知つたので、思はず、

「あ、源左衛門様だ！ 竹田様だ！」と、叫んで、影の様に消えて行く源左衛門の姿を眺めては、涙を流しながらお辭儀をしました。それから奥七は、狂ひの様な恰好をして、飛ぶ様に自分の家へ歸り、おかみさんに小判を見せました。

翌日、奥七は大元氣で、領主の白川權十郎の處へ出かけて行きました。權十郎は奥七を見るなり、

「オイ、奥七、何處をうろつてゐたのだ。年貢の金は持つて来たやうな。さア早く出せ、出さなければ村を迫出すぞ。」と、怒鳴りました。

奥七は、おそく、

「ハイ、お金は持つて歸りました。どうせしつかり解散なすつて下さいました。」といつて、籠から小判を出して積み上げました。權十郎はびつくりしました。奥七がへいぜい村の者から敵はまされてゐるので、權十郎には何かにつけて邪魔なので、今年こそは、奥七が金に困つてゐるのを幸ひにして、村から追出してはうと思つてゐたのです。しかし、奥七がちゃんとお金を持つて来たので、權十郎も止むなく、それを受け取りました。

權十郎は、奥七が歸つた後で、もう一度受けとつたお金の勘定をしようと思つて、自分の居間へ入りました。すると、どうです。今しがた積み重ねて置いた小判が、一つ残らず木の枯葉に變つてゐるぢやありませんか。權十郎は氣狂ひの様になつて、よく調べて見ましたが、たしかに小判は一つもありませんでした。

「狐にでも、だまされたのかな。」

と思つて、自分の家の者にも尋ねてみましたが、たしかに奥七はやつて来て、年貢を拂つて行つたのです。そこで權十郎は、いろ／＼思案しましたが、人に話せば物笑ひになつて、恥だと思ひ、誰にも話さずになりました。しかし、口惜しくつて、口惜しくつて何時までもあきらめられずになりました。これといふのもつまりは、竹田源左衛門の仕業である事はいはずと知れた事です。

さて、奥七の方はその後、する事なす事、いゝ事續きで、だん／＼家が築えて行きました。そして死ぬ日まで竹田源左衛門にあつた日の事を忘れずに、思出してゐました。「源左衛門様は、三日月湖の底にゐらつしやるのだ。」といつては、毎朝湖の方を拜んでゐたといふ事です。(をばり)



山椒の木
 上總は鱧の
 大漁だ
 おいらが父さん
 いつかへる
 聞かせてくれぬか
 山椒の木



田舎の田舎の

山椒の木
 野口雨情





琴の太郎 (長篇童話)

小山内 薫

五

太郎は人に知れないやうに、そつと舟を乗り出しました。海はいつものやうに荒れてゐましたが、

もどし／＼甲板へ登つて、かねて勝手は知つてゐる事ですから、直ぐ船底へ降りようと思つて、揚戸に手をかけました。

戸を明けると、船の下の方から眞黒な煙がむつと立ち登つて來ました。もう猶豫はしてゐられませんが、太郎は梯子を傳つてどん／＼下へ降りて行きました。すると、鼻のやうな聲が黒い煙の中でしました。

煙が少し薄くなると、太郎の目の前に黒い影が澤山見えて來ました。黒い影のまん中には、眞赤な火が燃えてゐて、その上に眞黒な大きな鍋がかけてありました。鍋からは眞黒な煙が立ち登つてゐて、その側に煙が泣き崩れてゐました。

黒い影は何かがや／＼騒ぎ始めました。太郎はいきなりその前に膝を折つて、両手を突きました。「魔王様、どうぞお許し下さいまし。わたくしは

太郎はびくともせず、片手を高く上げながら、片手でせつせと櫓を漕いで、夕方近くには、もう魔の船の直ぐ側まで來ました。

甲板には魔者の影も見えませんが、太郎は大聲に

決してお姫様の爲悪しかれと思つて致したのではございません。お姫様に濱の景色を御覽に入れたいと存じまして、また一つには、わたくしが、お船でお世話になりましたお禮に、陸の御馳走でも致して上げたいと存じまして、致した事でございます。魔王様にお伺ひ申し上げれば、きつとお許しがないと存じまして、悪い事とは存じながら、つひそうつとお船を抜け出したのでございます。

どうかわたくしを御存分になすつて下さいまし。お姫様に少しも罪はございません。どうぞお姫様はお叱りにならないで下さいまし。わたくしもこれからはきつと謹みます。もうこれからは魔王様の御家來になりますから、どうか今度の事だけは御勘辨遊ばして下さいまし。」

太郎はかう言つて謝りました。魔王の家來にならうなどといふ心は少しもなかつたのですが、今

の場合さうでも言はなければ、とても魔王の怒は解けまいと思つたので、一時逃れにこんな事を言つたのです。

魔王は暫く考へてゐましたが、手人の一人と何だか分からない詞で相談のやうな事をする、やがて太郎に向つて、かう訊きました。

「太郎、鍋で煮てゐるのは何だと思ふ。」

「わたくしの姿でございませう。」

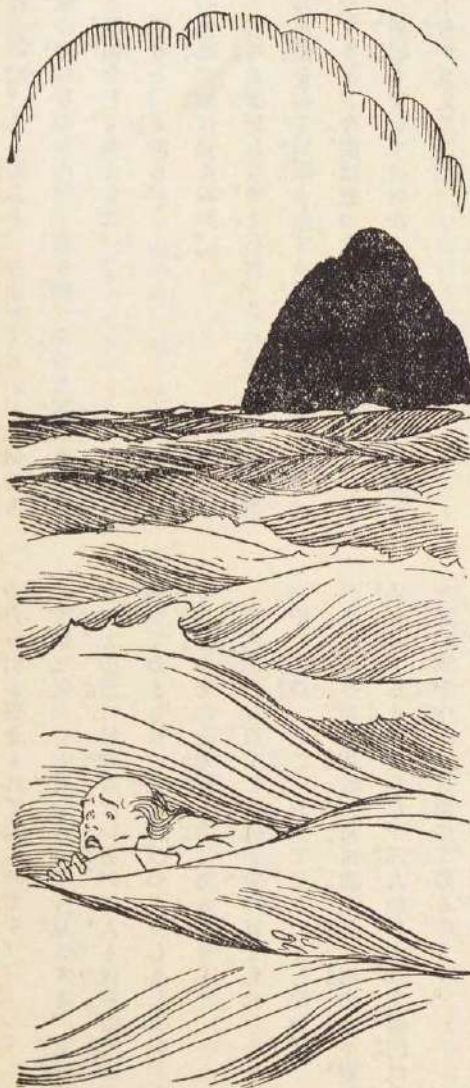
太郎が平氣でかう答へますと、魔王は物凄く笑ひながら、

「さうだ。もうこの夕方には無い命だつた。だが、魔界へはひりたと言ふ事なら、許しても遣らう。姫を連れ出した罪は重いぞ。許し難いところだが、今度だけは目をねぶらう。この船にゐて、よう働くのちや。好いか。」

太郎は魔王の心の思ひの外早く解けたのを喜び

た。同じ船の中にあながら、もう姫に會ふ事などは、まるで出来なくなりました。

三日ばかりといふものは、一艘の船も見えませんでした。すると、四日目の朝、遠くの沖の方に一つ黒いものが浮いて來ました。何だらうと思つて、目を据えて見ますと、それは間違ひもなく一



ました。

すると、一人の魔者が黒い烟の中から、木彫の小さい像を一つ取り出しました。像の半分はもう黒く焦げてゐました。若し太郎の來やうがもう少し遅かつたなら、太郎の命はなくなつてゐたでせう。それを見ると、太郎も姫も、ほつと安心の吐息をつきました。

魔王はやがて申しました。

「これ太郎。これからは晝間の内、一人で甲板に出て見張をするのだぞ。若し沖の方にでも小船の影が見えたら、直ぐと下にゐる者へ合圖をするのだぞ。」

「畏りました。」

太郎は直ぐとかういふ役目を言ひつけられて、爲方なしに、毎日毎日たつた一人で甲板へ出て、潮風を浴びながら、波と眺めつくりをしてゐまし

艘の漁船らしいのです。

太郎は聲を上げて、下の魔者達にそれを知らせようとしたが、若し自分が船の來た事を知らせようものなら、又あの厭な鼻のやうな鳴き聲がして、船も人も油の海へ沈んでしまふのだ。今自分分が聲さへ立てなければ、あの漁船は無事に濱へ

着くのだ。さう思ふと、合圖をするのが如何にも
氣の毒になつたので、態と軸へ坐つて居眠りをす
る眞似をしてゐました。

すると、下から、

「太郎、船は見えぬか。」

と叫ぶ聲がして來ました。それでも、太郎は知
らん顔をして居眠りをする眞似をしてゐました。

すると、今度は怒つたやうな聲で、

「居眠りをしてはいかん。よう見張をしろ。あの
小舟が見えぬか。」

かう叫つたかと思ふと、やがて例の鼻のやうな
叫び聲がしました。

太郎は居眠りから今覺めたやうな顔をして、立
ち上がりました。そして、遠くの小舟の方を見ま
すと、もうその舟は磁石にでも吸ひつけられるや
うに、くる／＼くる／＼廻りながら、こつちの船

きました。太郎は繩の片つ方の端を持つて、一生
懸命に引つ張りましたが、なか／＼子供の力で茂
右衛門を引き上げる事は出来ません。

両方で引つ張り合つてゐる最中に、大事の繩は
途中からぼつりと切れてしまひました。

たつた一本しかない繩が脆くも切れてしまつた
ので、もう茂右衛門を助ける望はなくなつてしま
ひました。下では茂右衛門の苦しやうな呻き聲が
聞こえます。太郎はもう氣が氣ではありません。

甲板の上を駆け回り廻つてゐる間に、ふと躓いた
ものがありました。と見ると、それは姫が夜甲板
で弾く琴でした。

太郎はいきなり琴を海の中へ投げ込まうとしま
したが、ふと考へて、自分の脇差をすらりと抜く
と、それで一つの絃を切つて、それへ姫に貫つた
指輪を結びつけました。

の方へ引き寄せられて來るのです。

やがて近づいた舟をよく／＼見ますと、意外に
も、この舟には知らない男が二人と茂右衛門爺が
乗つてゐました。太郎はびつくりしましたが、も
う自分にそれを助ける力はありません。

茂右衛門は直ぐに太郎を見つけました。

「や、若様、ここにお出でなさいましたか。」

と、かう言ふ内に、舟は忽ち油の海の中へ巻き
込まれてしまひました。二人の男と茂右衛門はも
う油の水の中を泳ぎ廻つてゐるのです。

太郎はどうにかして助けて遣りたいと思ひまし
て、うろ／＼しましたが、どうする事も出来ませ
ん。ふと見ると、船の方に細い繩がありましたか
ら、もう夢中になつて、いきなりその繩を海の中
へ投げて遣りました。

茂右衛門は待ちかねたやうに、その繩に縋りつ

太郎は琴を抱へて、下の海を覗きながら、
「茂右衛門。この琴につかまつて行けば、直ぐ濱
へ歸られるぞ。濱へ歸つたら、太郎の爲に悪魔調
伏の前願を立てろ。今夜、太郎はそちの代りに、
この油の海へ投げ込まれるのだ。」

かう言つて、琴を海の中へ投げ込みました。茂
右衛門は食ひつくやうに、それに縋りつきました。
「若様。急いでお救ひに参ります。わたくし一人
ではどうする事も出来ませぬ。きつとお助けに参
ります。」

かう言ふかと思ふと茂右衛門は、直ぐと濱を目
ざしました。指輪の力で、茂右衛門の體は水の上
を矢のやうに走りました。そして、もう見えなく
なつてしまひました。

勿論、二人の男は、もう疾うに水底深く沈んで
しまつてゐました。(つづく)

蟻のお國

(長篇童話)

長田 秀雄



前號までの梗概 淳さんは支那の偉い軍人でしたが、あんまりお酒を飲むので免めさせられました。ある時、お庭で酒を飲んでゐますと、大槐安國といふ國の王様からお使が来て、金枝公主といふ美しいお姫様のお嫁さんになつてくれといひましたので、淳さんは早速行つてお嫁さんになりました。ところが、お國の王様が金枝公主をお嫁さんに仕立てて下さりましたが、お國の王様が金枝公主を金枝公主に改めたので、駈つて大槐安國へ取りかへることに

噂がたちました。そこで淳さんは金枝公主をつれて、檀羅國に近い南柯郡の大守となつて行きました。そこで、瓊英公主といふお姫様が生まれました。お姫様が二十歳になられた頃、また檀羅國の王子がお嫁さんにくれといつてきました。淳さんは驚きました。その頃、金枝公主に御病氣で、甌江城といふ所の別荘で瓊英公主にお嫁さんながら養生してをられました。すると不意に檀羅國の王子が大軍をつれておしよせて来ました。

四

遠くの方から敵兵の恐ろしい叫びごゑや、馬のいななく聲が、きこえて參りました。もう、腰元たちは、眞蒼になつて、顫えて居ります。

金枝公主は、これはかうしてゐる場合ではないと思ひました。そこで、恐がつて役に立たない腰元たちを叱つて、甌江城に残つてゐる士官を呼んで來させました。そして兵隊の内一番氣の利いた男を、馬に乗せて、淳さんの居る南柯郡の都へ事情を知らせるために急いでやりました。

：兵隊は馬の蹄から火花が散るやうな勢で驅けてゆきました。金枝公主は、すぐその士官に戦の手くばりを云つけました。そして、自分も美しい衣服を脱いで、黄金で威した鎧をきて、長い黒髪を後になびかせながら、甌江城の櫓の上に現

はれました。お母さんの振舞を見た瓊英公主は、銀で威した鎧をきて、お母さんの後について、櫓の上に現はれました。

みると、もうお城の門の前には、敵と味方の死骸が、俯向になつたり、仰向になつたりして、澤山ころがつてゐます。兩方の兵隊の射る矢が、數知れぬ羽蟲の飛び歩くやうに、紛々と、飛びちがつてゐます。丁度日が西に傾きはじめて時でした。西の方の奇麗な雲の間から射す太陽の光が、キラキラと敵味方の大きな旗や、刀や鎧の先に輝いてゐました。

金枝公主と瓊英公主の金銀の鎧も、やはり日の光を受けて、敵陣まで輝いて見えました。すると、檀羅國の王子は、鎧で威した真黒な鎧をきて、黒い甲をかぶつて、黒馬に乗つて、兵隊たちの前へ出てきました。

真黒な檀羅國の王子の姿をみると、金枝公事は、大きな聲で、

「私の國は、これ迄貴方の國に對して、何一つ悪い事をしないのに、かうして、不意に攻めよせるのは、亂暴ではありませんか。私は女でこそあれ、決して、貴方に負けるやうな不甲斐ない者ではありません。御望とあらば、何處までも戦つてお眼にかけませう。」と、云ひました。

檀羅國の王子は、金枝公事と瓊英公主の奇麗な物を見て、吃驚してしまひました。

やがて、檀羅國の王子は、
「いや、私がかうして貴方の國を攻めにきたのは、決して土地を掠めたり城を奪つたりする爲ではありません。私の國には、女が居ないので、貴女を貰つて、私の妃としやうと思つてゐると、貴女のお父さんは、私の心を知りながら、人間の性さん

キリキリと引きしはつて、ひやうと放しました。矢は高い音になり響きながら、甞江城の櫓の方へ飛んで行きましたが、忽ち、瓊英公主の錦の袂を縫つて、傍の柱に、ぐさと突立ちました。

敵の兵隊は、それをみると、わあつと関のこゑを上げました。
金枝公事は、すぐ、家來に黄金の半弓を持つて來させて、それに白羽の矢をつがへ、暫らく満月のやうに引きしはつてゐましたが、やがて、公主の右の手が、バツと後へはねるかと思つて、矢は人々の眼にも止まらないやうに早く弦からはなれて、檀羅國の王子の乗つた黒馬の肩間につゝ立ちました。



を聲に取つてしまひました。私はその恨を晴らしたいため、また一つには、貴女のかはりに娘さんの瓊英公主を妃に申受けたいため、かうして兵隊をつれて來たのです。もし、命が惜しいなら、早く降参して、瓊英公主をお渡しなさい。」と叫びました。それをきくと、金枝公事は大きく怒つて、
「貴方は檀羅國の王子とも云はれる人に似合はず心の汚ない卑怯者です。そんな方には、娘を差し上げる事は出来ません。もし、どうしても娘が欲しいと思ひなされるなら、腕の方で取つて御覽なさい。娘はあなたの妃になる前に死んでしまひませう。」
と云放つて、母子で顔を見合せて笑ひました。それをきいた檀羅國の王子は餘程腹を立てたと見えて、物も云はずに、鞍の半弓に矢を香がへて馬は高い聲でいなないで、蹄り上つたかと思ふと、ぐたりと、其處に倒れてしまひました。不意



を打たれて、檀羅國の王子は、厭と云ふ程ひどく地面にたゝきつけられ
ました。

それを見た塹江城の人たちは、どつと聲を上げて笑ひました。

檀羅國の王子は火のやうに怒つてしまひました。そして、兵隊に向
つて、

『何をお前たちは、ぐずぐずしてゐるのだ。早く此城を攻めおとして
しまへ。』と高い聲で命つけました。

烈しい戦が始まりました。

凝乎つと櫓の上で戦の成行を見てゐる金枝公主と瓊英公主は、もう
気が氣ではありません。

もう、淳さんの處へ、さつきの使が着いたかしら。早く援の兵隊が
来ないかと、そればかり考へてゐました。

敵の兵隊は大勢だし、味方は小勢なので、暫らくする内に、もう味
方の兵隊の疲れて来たのが、二人にも分りました。金枝公主は、

『娘や、よく遠くの方を見てゐておくれ、もし砂埃が雲のやうにあが
るのが見えたなら、お父さんから頼みに来たのだからな』と命つけまし



た。
瓊英公主は黙つて、遠くの方を見つめてゐました。

どつと鬨の聲がまた上つたので、金枝公主が驚いて見ますと、敵は
王子を先にして、もうお城の門のところまでつめかけて来てゐます。

味方の兵隊は、その時は、もう始めの半分くらいになつてしまつてゐま
した。金枝公主は、

『まだ砂埃は見えないかえ。』と聞きました。

瓊英公主は、

『まだです。』と悲しさに答へました。

金枝公主が敵の兵隊の方を見ますと、大將の王子につき添つて、こ
の間花を賣りに来た家來が、につこり笑つて立つてゐました。

『おや、お前は、この間の唄のうまい花賣りぢやないか。』と驚いて、金
枝公主は叫びました。その家來は、すうつと櫓の下まで進んで来て、

『お妃さま、先日は失禮いたしました。私は本統は檀羅國の王子様の
家來で御座います。あゝして、花賣りになつて、お城へ參つたのは、
王子様の御命ついで、貴女の方の様子を探るためだったので。』と、



「大勢で御座います。大勢で御座います。」と叫びながら、飛込んできました。その家來から様子をきいた淳さんは、すぐ、取るものも取りあへず、騎兵を三千人つれて、壘江城を差して馳足で飛んでゆきました。淳さんは別に、周さんに命つけて、潭山の兵隊をつれさせて、檀羅國へと差向けました。王子が兵隊をつれて、こつちへ来てゐる留守に檀羅國を打せうと云ふ考へなのです。淳さんは命令をうけて出かけてゆく周さんをつかまへて、

「お前はなかなか戦は名人だけれども、どうもお酒が好きで、そのためによく失敗を仕出來すから、今度は決して歸つてくるまで、お酒を呑んではいけない。もし、俺の命令にそむくと、きつと罰するから、さう思ふがいい。」と厳しく命つけました。



馬鹿にしたやうな顔付で申しました。それをきくと、金枝公主は、眞蒼になつて怒りました。そして、物も言はずに、また、黄金の半弓に白羽の矢を番へて、ひやうと放なしました。その矢は油断してゐる花賣りの胸に立ちました。花賣りは少しもたまらず、そこへ倒れて死んでしまひました。「え、生意氣な。此上は一人残さず殺してしま

七八
へ。」と大事な家來を眼の前で殺されたので、檀羅國の王子は踊り上つて怒りました。「お母さま。まだ砂埃は見えませんか。」と、瓊英公主は、また悲しさに云ひました。

淳さんはその時、丁度宴をして大勢の家來たちと一緒に、遊んでゐました。田さんも周さんもその席に出てゐました。田さんは、淳さんに向つて、「私は少し心配になりましたから、實は、この間、家來を檀羅國へ、そつと探りにやりましたが、その家來から何ですか、頻りに兵隊が集まつてくると云ふ報せがありました。きつと、我國を攻めに來るつもりで御座りませう。」と眉の間に皺をよせて、申しました。そこへ壘江城から、息もたえだえになつて馬を馳らせた家來が、

「はい、畏こまりました。」と、云つて、周さんは檀羅國へと出かけました。

塹江城では、もう、いよいよ味方の兵隊が打死したり傷をしたりして、少なくなつてしまひました。金枝公主は甲斐甲斐しく一方では腰元たちに負傷した人たちの看護をさせ、一方では、残つた兵隊を指揮して、戦をつゞけてゐました。すると、遠方を凝乎つと見つめてゐた瓊英公主が、突然大きな聲で、

「お母さん、お母さん。砂埃が雲のやうに立上りました。」と叫びました。

「え、本統かい。」と、うれしまぎれにやつぱり大きな聲で周返しした金枝公主は、黙つて指さす瓊英公主の手の方を見つめました。

離れた空のはての方に、威風凛々、瓊英公主が云ふ

「娘や、いよいよ、お父さんが援ひに来て下さつたんだよ。」と、云つて、金枝公主は、残つた兵隊たちに、すぐ、敵に向つて、突撃するやうに命づけました。

また関の聲が、残つた兵隊たちの間から勇ましく起りました。

敵陣は散々に亂れてきました。見てゐる内に、檀羅國の兵隊はもう王子を始めとして、傷をした人や、死んだ兵隊を、そのまゝ打棄て、逃げ出しました。

淳さんは逃げる敵を、手下の大將に追ひかけさせて、自分は近侍の家來をつれて、城の内へ入つてきました。

金枝公主をはじめ塹江城の人たちは、三度関の

とほり、もうもうと砂埃が立迷つてゐました。

金枝公主は、氣が違つたやうに笑ひ出しました。

「あゝ、お父さまが援ひに来て下さつたんだよ。娘や、安心をおし、もう大丈夫だから。」と、云つて、今度は瓊英公主の手を取つたまゝ、嬉し泣きに泣いてしまひました。

残つたわづかの兵隊たちも、それをきいて、すっかり元氣になりました。

矢が數知れぬ羽蟲の飛び歩くやうに紛々と飛びちがつてゐます。

太陽は、もう半分ばかり沈んで、あたりは大部分暗らくなつてゐました。敵味方の大きな旗や、刀や、鎧の先が、暗い内で、チラチラ見えたり隠れたりしてゐました。

その内に、遠く大勢の関の聲が、天地も割れるばかりに響いてきました。見ると、檀羅國の兵隊

聲をあげて、淳さんを迎へました。

淳さんは金枝公主の勇氣を大さう賞めました。

そして、討死した者や、負傷をした兵隊たちを厚くいたわつてやりました。手柄に従つて、思ひもかけなかつたやうな御褒美を、兵隊たちにやりました。

その夜は、城内で、宴を開きました。萬歳の聲が、一晩中、塹江城の内からきこえました。

淳さんから命づけられて、五千の兵隊をつれた周さんは、大急ぎで檀羅國へ打入りました。

檀羅國では、案の定、すつかり油断してゐました。それに、王子が兵隊をつれて行つてしまつた後なので、ほんのわづかしきや戦の役に立つ人は残つて居ませんでした。

周さんは勢にまかせて、檀羅國の都に攻入りました。



年を取つた國王は、どうとも仕様が
ないので、降参してしまひました。周
さんは、いろんな寶物や何かを分捕り
して、もうすつかり安心してしまつて、
その晩、とうとう淳さんの殿しい命つ
けもかへりみず、お酒を呑んで酔つて
しまひました。

大將がお酒を呑むのを見た兵隊たち
は、もう、どうせ敵は居ないんだから
構はないと思つて、やはり、お酒を呑
んで、ぐうぐう寝てしまひました。

壘江城で散々な眼にあつた檀蘿國の
王子は、やうやく兵隊をまとめて、自
分の國に歸つて來てみると、この始末
です。

そこで、王子は、早速、家來に命づ

周さんは驚いて、命からがら大槐安國の方へ逃
げて來ました。

もうその時は、淳さんは金枝公主と瓊英公主を
つれて、南柯郡の都へ歸つておりました。周さんが
一人で逃げて歸つたのを見て、自分の戒をそむい
たのを知つて、大さう怒りました。そして罰とし
て、周さんの首を切る事に決心しましたが、田さ
んがたつて諫めたので、殺すことだけは思止りま
した。

周さんはとうとう牢屋に入れられました。

「あゝ、馬鹿な事をした。あれ程止められたのに、
俺は何故お酒を呑んだりしたのだらう。こんな事
なら、いさぎよく、討死した方が良かったです。」と、
自分の罪を悔いて、周さんは牢屋の内考へてお
きました。(つづく)

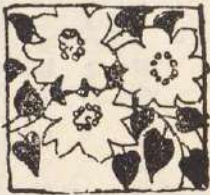
けて、周さんの兵隊の様子をさぐらせると、皆
油断して酔つて寝てゐると云ふ事が分つたので、
大喜びで、こつそり都の近くへ歸つて來ました。

そして、その晩おそく夜討をしました。

俄に開の聲がきこえて、敵兵が攻めよせてきた
ので、酔つた兵隊たちは、すつかり狼狽しまひ
ました。自分のだと思つて人の甲をかぶつたり、
一疋の馬を二人で乗らうとしたり、まちがへて同
士討を始めたり、散々になつて、負けてしまひま
した。

檀蘿國の兵隊は勢に乗つて、まごまごしてゐる
周さんの兵隊を、切つたり突いたりして大部分殺
してしまひました。

そして、降参して敵の中にゐた國王を取りかへ
しました。



幼年詩選
若山牧水

雲雀 (賞)

仙臺市北目町二十五
鈴木幸四郎

麥の穂黄いろく
日が照つた
雲雀ひらひら
とび上り
雲の中に
かくれた。

評、短い言葉のうちによく初夏の風景が
詠んである(牧水)

雀の子 (賞)

和歌山縣粉河小學校尋四
木村唯夫

雀の子。
かはらのすきから
首出して、
すぐ巢の中へ
ひっこんだ。

ほしいほしい
雀の子。

評、この作者と同じ學校から大勢の人が
投書して来た、そして皆上手だ。けれ
ど少し上手すぎて、頭で作りすぎて、
ほんたうのこゝろもちが出てゐなか
つた。中でこの作者のこの雀のうた
が一番自然でいゝと思つた。(牧水)

日曜日

和歌山縣粉河小學校尋四
恩賀定四郎

エスさま、エスさま、
私のすきなエスさま。
うれしい、うれしい、
ほんとにうれしい日曜日。
評、これも言葉はすくないが自然とその
心が出て居る、佳い詩だ。(牧水)

童謠

野口雨情選

いちご

群馬縣勢多郡稻川村月田
青柳花明

瑪瑙の玉の毒
食べたら、甘い
一つとつて食べた
二つとつて食べた
みんなとつて食べた。

理髮屋

東京市小石川區大塚窪町二四
鷹田守一

あかりがついた
理髮屋のあかり
硝子の窓に
寄附にういた
理髮屋のあかり。

ごんび

名古屋市東區神樂町
川本弘一

空に 飛んだ
とんび
丸い丸い輪を描いた
もつと、
輪を描け。

蛙

新潟縣三條町
宮本壽人

昨日も今日も
土砂降り雨だ
お池の蛙
飯買ひにいつた
飲一升買つた。

盲人の提灯

相模國鎌倉屬ヶ谷
水澤美雄

盲人の提灯
見てよけろ
お供の提灯
盲人の提灯
盲人はお供だ
見てよけろ。

よしきり

大阪市西區築港三條通一ノ一〇
岡田勇次郎

蘆の茂つた
河原の よしきり
ぎいっこ ぎいっこ
舟が通つた。

紅い目高

東京市赤坂區增町三
間山祐磨

猫

静岡市東草深町三の九
賤機民秀

眞黒い親猫
ピンと立つた尻つほ
薬屋の屋根から
ピョンとねねて
おりた

呉服屋の前

京都西陣
小川美稚子

着物買ひにいつたれば
わん／＼小犬
呉服屋の前で
わん／＼吠えた
着物は買はず
泣き泣き逃げて来た。

横町

神戸市西出町
糸見みのる

くすり賣り

遠い國から
はるばる来たは、
あれは富山の
くすり賣り。

大阪市南区御藏跡町四
稻垣ひろし

くすりやくすり
くすりはいらんか
富山のくすりや
箱持つて歩く。

評、すらくと心のまゝに調子が出てあ
る。柴屋の姿が自づと眼に浮かんで
来る。(牧水)

めぐら

小めくらめくら
めくらの町にや
あんまのめくら
年とつためくら
ぞろぞろと居るよ。

静岡縣田方郡中大見小學校尋六
秋野芳花

小雀

ちゆんく雀
お山の雀
ちつちやい雀
今日も又屋根へきて
一寸あたまをふつて
隣の屋根へいつてしもた

兵庫縣美露郡口吉川小學校尋五
土居忠

あしだ

カラカラカラ
よく鳴る下駄だ。
とうとう降らずに
天気になった。
あしたも降らずに
天気になあれ。

和歌山縣粉河小學校尋四
馬田吉豊

鳩

横町の角で
石とつて投げた
大犬 小犬
一緒に吠えた。

東京牛込市谷河田町一九
佐藤勝熊

あんなさんなん
鳩の群

向ふの坊やはポツポツ
こつちの爺やもポツポツ
黑豆 白豆
バラバラ

春姫

静岡市榮町六三
山口雄吉

春姫様は
遠い 遠い たれも
知らないところへ
おいとまますると



雨のはれ間(賞)

福井縣高濱小學校高一
鳴戸正直
今まで勢よく降つてゐた雨もからり
とやんだ。家の人々は、雨はもう降ら
ないだらうかと、空を見て居られた。
空の一部がはれて来た。雲もだんく
少しづつ、どこかへ行つた。木々は皆
生々とした色を見せて居る。垣根の隅
には美しいバラの花がこちらに五つ、
あちらに三つと咲いてゐる。もう大分
はれたから、降らないだらうと思つて
ゐると、にはかにおにの様な黒雲があ
らはれて、はれてゐた青空をおほふて
しまつた。さあまた始めの空と同じや
うになつたと思つてゐるとさあ勢よく
降つて来た。かへるがピョンン

お寺の鳥

鳥が鳴いた
お寺の屋根を
廻つて鳴いた
和尚さん頭
丸いと鳴いた。

佐賀縣佐賀郡中川福村
有馬淳

ま、ごご

東京市外西大久保七
佐藤盛二

菜の花 きざんだ
粟の餅搗かう

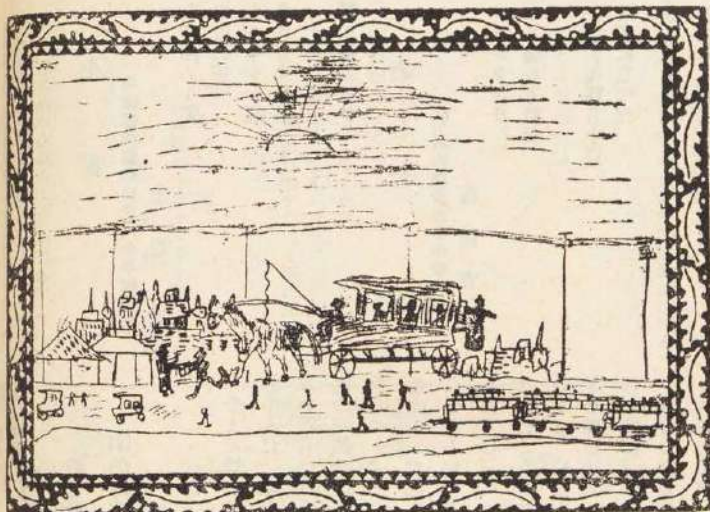
椿の花 きざんだ
赤のまんま炊かう

おきさんおいで
帰つて食べよう。

ものもらひ

山下安子

この間の日曜の日であつた。私が一
人でおるす番をしてゐると、顔も頭も
毛をボウ／＼とはやして墨や、しるの
ついたあかだらけのボロ／＼着物をき
て、すねから下どろにまふれて、まつ
黒になつた足であわれつほいこゑを出
しながら、ビツシヤリとお元關へは入
つてきた。私はあんまりきたないので
「何もないよ」といふと、お米が二合
餘りと一錢が六つほどいれてある新聞
紙を疊の上にひろけて、なほ／＼あわ
れつほい聲を出してわからんことをい
ひながらベコ／＼頭ばかり下けてゐる
ので少しかはいさうになつたのときた
ないのでせつかく大じにためておい
たあなのあいた五錢を一つなけてやつ



郎太英坂吉 年三校學小常尋庄寺縣賀滋 (賞) 「街の夏」 畫自由

八八
た。すると朝鮮人はよるこんでおじぎもしないで出ていった。私はやれ〜と思つて安心したが、こじぎにやつた五錢がをしくなつてどうしてもあきらめられなかつた。せつかくきれいにはいたお庭は、大きな足跡をつけてよごれるし、大じの五錢はこじぎにとられて朝からまんの悪い日だと思つた。三十程の年でりつばな體をもつて居て、なぜ仕事をしないで物もらひばかりして暮すのだからとふしぎに思つた。

新學期の第一日

長野縣松本市筑摩小學校尋五

林

薫

四月一日に新學期が始まりました。九時頃學校へ行くと皆嬉しさうに遊んで居ましたので私も一しよに遊びました。其の内にガン〜と始業の鐘が響くやうに學校中にひゃき渡りました。すると生徒は皆吸ひ込まれるやうに教場へ入りました。後の運動場はガランとしてゐました。私共が教場へ入ると先生が來られました。私の知つて居る松森先生でした。やがて席順も定まり、級長の選舉となりました。先生は一回を見まはして、これから級長の選舉をします、誰がよいでせうかと聞かれると、中島さんだ、林君と大聲に言ふと、皆後から「林」「林」と言はれました。私は自分が言はれたので、嬉しい様な恥しい様な氣がして顔をあかくして下をむいて居ました。

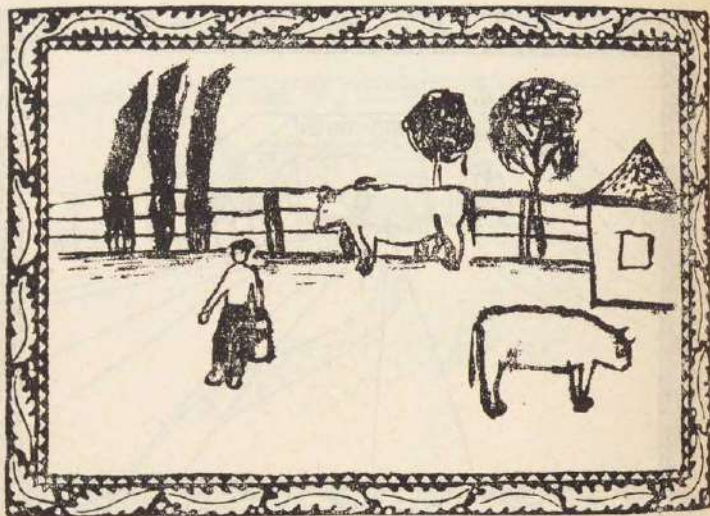
それで松森先生も笑ひ乍ら、私の方を向いて「林君、君を級長にするから、眞面目にやつて呉れ」と仰いました。それで私は只「ハイ」と言つたばかりでした。先生は「皆さん一年進んだのですから、しつかり勉強しなさい。今日は之れだけです。お歸りなさい」と言はれたので私共は教室を出ました。私は道々自分が今度五年の一組の級長になつたのだと思ふと嬉しくてたまりませんでした。

梅雨の日

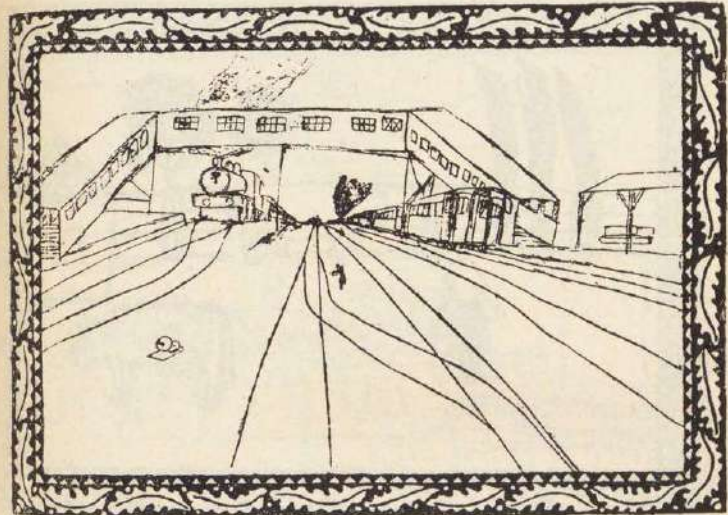
山梨縣上九一色尋常小學校尋五

土橋 郁子

もう降り出してから四日になります。今日も絹絲のやうな雨がシト〜と降つてゐます。木の葉は皆きれいに洗はれて、いちやくの木では、ぬれてピカ〜光る葉の中で青蛙が、嬉しさうに鳴いてゐます。裏の小川も水がふえて、赤く濁つた水が、白い泡を船



與勝井櫻 年五校學小常尋郷内縣葉千 「や牛」 畫自由



明 田 高 年一校學小常尋部戸市濱横 「場車停」 畫由自

のやうに浮べて流れてゐます。川端の柳の細い枝が風の吹く度に、フハ／＼ゆれて、滴がボタ／＼川の中へ落ちます。時々、燕がスーッとその細い枝をくぐつてとんで行きます。向岸を、から傘をさした人が通つて行きます。向の山寺は、松並木と續いて、霧の中へ包まれて、ボシヤリと墨繪のやうです。

机に向つて、おさらひをしてゐると、何の音も聞えず只雨がとひを流れるのがサラ／＼云ふだけで、ほんとに寂しくなつて來ました。

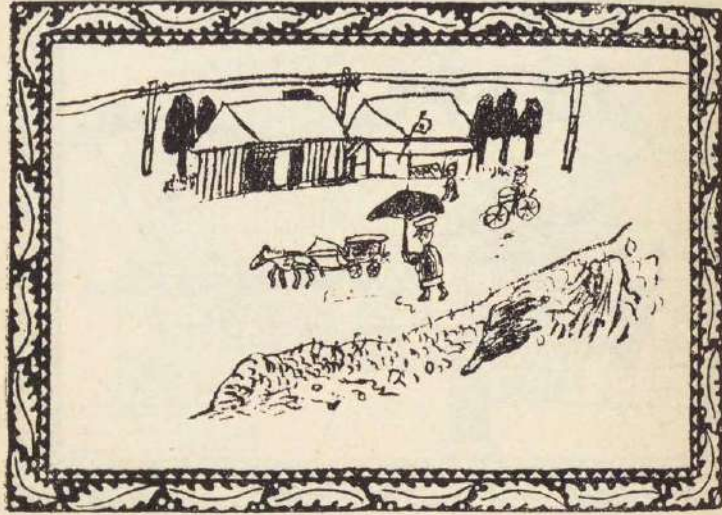
もつ夕方になつたのでせう。どこかで豆腐屋さんのトコトと云ふ喇叭の聲が聞え出しました。

妹の熱

朝鮮大邱公立第一小學校尋六
島 田 須 美 子

外では雨がしと／＼と降つてゐる。弟も妹もみんなねてしまつて、氣味の悪い程静かな晩だ。じつとしてゐると、どこからか、ふくめんをかぶつた大男が、キラ／＼と光る刀を持つて、「コラ、金を出せ、出さなければ殺してくれぬ。」といつて、出てきさうだ。

畫でも描かうと思つて机を出して、筆法の口輪を見ながら



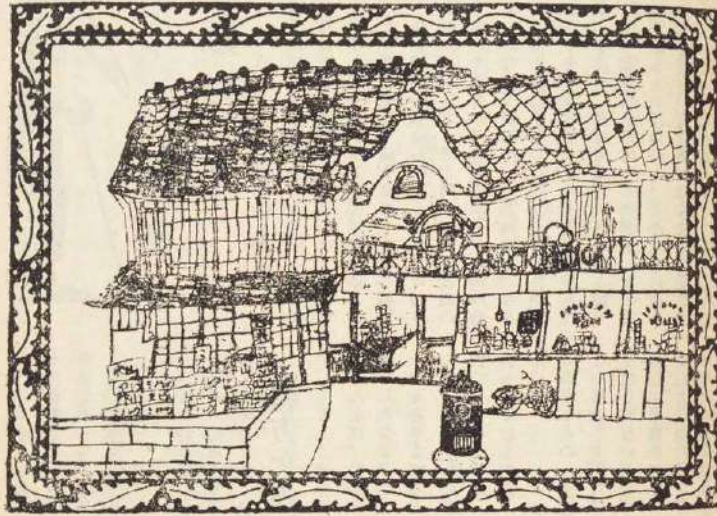
雄重野有 村源郡庫巨中縣梨山 「店 茶」 畫由自

がらかいてゐると、ねてゐるはつちの妹が「姉ちゃん、いぢやんに火がついた。」と、眞赤な顔をして肩につかまる妹ながら何だかこはいやうだ。ひたいに手にあて、見ると、火のやうに熱い。急いで體温器ではかつて見ると、三十九度一分もある。早くお父さん達がかへつていらつしやればよいがと思ひながら、妹をおぶつて玄關へ出る雨は相かはらず降つてゐる。何だか急に脊中が重くなつたと思つたら、妹はすや／＼とね入つてしまつた。

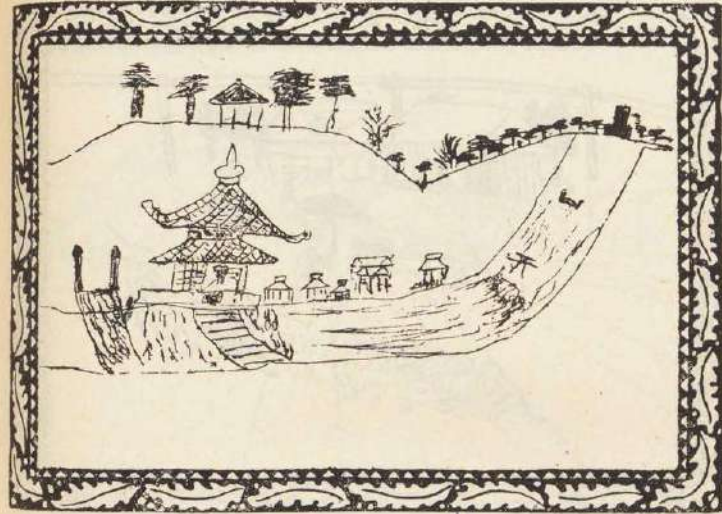
春のたより

朝鮮釜山第三公立小學校尋六
杉 山 節 子

お久しぶりでございます。大へん御無沙汰致しました。皆様はおかにはありませんか。私方は皆無事でございます。あなた様とおわかれ致しましてからはもう三年にもなります。私はわかれてからは大へんさびしくなり又心細くなりました。内地へかへられて今までは皆優等でお通りになりましたでせう。私も無事で通りました。あなたの兄さんは中學校へおはいりになりましたでせう。お目出たうございます。弟さんも大きくおなりになりましたでせう。私の内には妹が生まれまじつたけれど死んで



人正島岡 二尋校學小町番市京東 (賞) 「店商」 畫由白



知喜佐本山 年三校學小常尋庄寺縣賀滋 「堂藏地」 畫由白

しまひました。

あなたと仲のよかつた中江さんもおくににおかへりになり、吉富さんもおかへりになりました。お友だちの皆様も大へん元氣であります。今頃は色々な花の満開のころであります。この間近所の人やお母さんたちと水源地へ櫻見に行きました。その頃はまだ少ししかひらいてるませんでした。道ばたにはたくさんのお花のつくりがのこのこあたまを出してゐました。おとついは遠足で松島まで行きました。そしてかじめを大分取つてかへりました。そしてあくる朝おつゆの中に入れてたべました。大へんおいしゅうございました。もう少しつと運動會が来ますねえ、この夏には是非おいで下さいませ。皆様によろしく。さよなら。

四月十九日

節 子

富田京子様

よつばらひ

神奈川県鎌倉郡川口小学校高一年

鎌 田 富 子

今日は天気の良い日曜である。こんな陽気に家の中にひつこもつてるのもつまらないと思つて家を飛び出し

て江の島の方へと歩きました。江の島見物にゆく人で賑わつてゐました。江の島を此の上もなないもの、やうに語り合ひながら押合ふ團體を見るときたまになくうれしくなりました。よつばらひがやつて来ました。オッオッ危ない。あら、あらくつとハラくつしてゐるうちに電信柱で頭をカチンとうちました。その人はめがめめたらしく、ボカンしてゐました。やつとどうやら歩き出したやうだと安心してゐると、バタツところんでしまひました。私は遠くでこれを見てどうして家に歸れるのだらうと心配してゐました。

魚 焼 き

福井縣高濱小学校高一年

西 木 義 秀

ゐろりの火をかき出して、魚をはさんだ魚あぶりをのせた。やがて「ジリ／＼／＼／＼」と云ひ出した。強い香がする、くすほつて来た。てんと、裏へかへした。まだ頭の方が生あぶれである。残り火餅でなぶつたので、魚はぐだぐだにぐだけた。たうとう灰がついた。どうもならんから灰を落して、今度は火の上へせて、よくあぶつたら、かん／＼になつて、味がなさうになつた。



(通信)

童話について

野口雨情

童話には、六ヶしい言葉をもちゆることはいつの場合でもさげねばいけません。漢字の熟語をそのままもちゆることは無論いけませんし、又、漢字を音で讀ませることも、名詞とか、極く特別の場合をのぞく外はさげねばなりません。誰にでもすぐ判りのよい普通の言葉で書いて下さい。言葉の調子が言葉の音楽にさへなつて居れば、七五調でも、八八調でも、いくら破調子でも決して構ひません。それには、その調子がキチンとして、だらだらしないように、幾度も幾度も讀み返し繰り返し口の中で消化させてゆくのが第一なのです。調子がととのばないと、どんなよい思ひつきの内容でも、面白味がなくなつて了ひます。今回は、山崎山崎の童話があつて、

た、いつもよこしてくれる、藤田守一さん、水澤美雄さん、青柳花明さん達は、將來よい童話作家となる素質の方々と思ひました。應募童話のこと

選者

本月は割合集つた数が少いので、明月分のも集め、尙前月分の佳作と對照した上で優秀なものがあつたら、推奨して掲載します。

綴方を讀んで

選者

こんどは、たくさん集りましたが、いよのほんの少しでした。とびはなれていよのほ一つもありませんでした。この雑誌に出さねないほどいよのほがたくさんくると選者も愉快になるのですが、近頃のやうに、どれもこれもわるいものと、ほんとにがつかりしませう。

山下さんの「ものもらひ」はきたならしい乞食のすがすがしく書けてありました。そのきたない乞食が、きれいにはいいたお庭に大きな足跡をつけては入つてくるところや、あんまりあはれつづく、ものこひをするのでせつかくためたをいた五體の白濁をくれてやつて、あとでわしがるとさるなど、なかに

のうな、あつらしい方の童話が書きます。▼小山内薫先生 坊ちゃんといづらを書いたお豆腐屋さんの話も九月號に出ます。▼長田秀雄先生 の「藤のお園」と小山内先生の「琴の太郎」とは、共に來月で終ります。あのおしほがどうなるか、興味ある事です。▼ピノチヨ の評判は非常なものです。この様ないよの本が日本で生れるとは誰も思つてゐなかつたでせう。

一週年紀年號豫告

この九月で「金の船」も創刊一週年を迎へます。かす多くの少年少女雑誌の間にはさまつて、本當に幸福な一年を送る事の出来たのは、皆さんの御援助があつたからです。それで私達もどうかして此のお禮に、皆さんを大に喜ばせたいと思ひ、また一つには「金の船」の一週年をばななくしく記念したいと思ひまして、この九月はじめの十月號を、非常に目新しい、それでいて實に面白い一週年紀年號として出すことにしました。必ず「金の船」の一週年號として恥しくない様なものを出さうと思つて、今しきりと準備してゐます。記念號がどんなものか、それは未だお知らせしない事にします。來月號でくわしく發表

「金の船」の消息

▼「金の船」の童話 が、こんど日本蓄音器商會の依頼で、蓄音器に吹込まれることになりました。「金の船」の作曲が、これも、これも非常に優れたものばかりで、到底外の雑誌の及ぶもつかないのは一般に認められてゐる事です。さて、どれと、どれが吹込まれるか、それは何れ來月號でお知らせします。▼野口雨情先生 は今まで水戸に居られたのですが、今度いよ／＼東京へ出て來られ「金の船」の編輯をしながら、童話の普及につとめられます。▼九月號 には泉鏡花先生や、馬場孤蝶先生

よく書けてありました。土橋さんは先月のいよものでしたが、今月のよ／＼できてゐました。木の葉が雨に濡れてピカ／＼光るところや、赤く濁つた水が、白い泡を船のやうに浮べて流れるところや、杉並木のぼんやりして墨繪のやうに見えるところや、机に向つて勉強しようとする、とびを流れる雨の音が聞えるなど、うまいものでした。杉山さんの「春のたより」は、とくに優れてゐるといふのではありませんが、全體がすなほに書いてあるのとりました。近頃、ある地方の女學校の卒業生たちが、書いた手紙を集めたものを見ましたが、それは驚きました。といふのは、みんなきちんと書簡文の手本の型にあてはめて、四方の山線してとか何とか同じことばかりでいいに書いて、かんじんの自分たちの生活なり、心もちなりなどに至つては何を書いてあるからつともわからないからです。手紙には手紙の書き方があるものですが、そればかりおぼえたつて何にもなりません。私が綴方についていつもくりかへし／＼申してをりますとほり、自分の思つたこと、感じること、見たこと、聞いたことをそのまますなほに書くことがかんじんです。私の見た手紙といふのは、どれもこれもいよ／＼と

「金の船」の消息

▼「金の船」の童話 が、こんど日本蓄音器商會の依頼で、蓄音器に吹込まれることになりました。「金の船」の作曲が、これも、これも非常に優れたものばかりで、到底外の雑誌の及ぶもつかないのは一般に認められてゐる事です。さて、どれと、どれが吹込まれるか、それは何れ來月號でお知らせします。▼野口雨情先生 は今まで水戸に居られたのですが、今度いよ／＼東京へ出て來られ「金の船」の編輯をしながら、童話の普及につとめられます。▼九月號 には泉鏡花先生や、馬場孤蝶先生

子供の自由畫を募る 山本 鼎

子供諸君、——こんど、この雑誌で君たちの畫をいたいて、僕が、みんなの畫のうちから、選ぶだのを、毎月六つづらゐる此處に、寫眞の版に出すことになりました。

自由畫、といふのは、お手本や、雑誌の畫なんかを見て、描いたものでない畫のことです。君たちが、かつてに描いた畫のことです。ですから君たちはお手本や、雑誌の畫なんかをみて描かずに花なり、景色なり、動物なり、お母さんのお顔なり、なんでも、君たちの好きなのを、かつてに描いてごらん下さい。

お手本を見て描いたり、雑誌の畫なんかみて描いたものは、みんな落第ですよ、それから、あんまり、うすく、ぼんやりかいてある畫は、たいそういゝ畫でも寫眞の版になりませぬから、及第しても雑誌へは出されません。そのかはりそんないゝ畫は僕が戴いてだいにしまつておきます。

大人諸君、——以上の金を御賛成下さい。子供達は、本來、お手本を真似するよりも自由に、見る所のもの、もしくは見たことのあるものを描き度がるものです。さういふ子供には、出来るだけ、良質の畫用品を與へて下さい。そして、子供を愛すると同じ愛を以て、彼れの創作を迎へて下さい。大人に、智、感、情がある如く、子供にも智、感、情があります。大人に美術がある如く子供にも美術がある筈です。子供の美術は彼れの眼と手によつて自然から直接に獲へられた、そのものです。

▲童話童話募集

吾々がかくられたる童話、童話作家を紹介したいが爲めに、毎月童話童話を募集いたします。題材は勿論作家の自由ですが、内容形式は共に従來の型を破つた、眞に藝術的な作品を求めます。

原稿の枚数は、童話の場合には十行廿字詰原稿紙八枚以内、童話の場合には廿五行以内。優秀な作品は誌上に掲載し、且相當稿料を差上げます。

選者は、童話は野口雨情先生、童話は當分の内編輯部でいたします。

▲「金の船」誌友募集

「金の船」の誌友を募集いたします。誌友になれば、いろいろの便宜や特典がございます。誌友規則を知りたい方は編輯所宛にお申込み下さい。すぐお知らせいたします。

東京府下田編三五十一番地
「金の船」編輯所

自由畫

山本 鼎先生選
自由畫のことは、山本鼎先生が、前頁に書いて下さつたから、ごらん下さい。

綴方

編輯部選
綴方は、みなさんが、見たこと、思つたことを、そのままだん遣つてゐる言葉で書いて下さい。

幼年詩

若山 水先生選
幼年詩は山なり森なり花なり何でも見たり、感じたりしたことを、みなさんの好きなやうに、詩にして下さい。

自由畫はなるべく、半紙位の畫用紙に描いて下さい。
綴方、幼年詩は用紙も字數もみなさんの自由です。しかし、解りやすい様に墨かインクで描いて下さい。
住所、姓名、年齢などは落さないやうに、學校へ行つてゐる方は學校名と學級を、ちやんと書いて下さい。
人のものを真似たり雑誌や讀本や綴方の手本など見て書いたのはいけません。
よく出來たのは、雑誌にのせます。中でも優れたのには賞品をさしあげます。

定價一冊三十錢 送料壹錢
三ヶ月分三冊(送料共)九十錢
半年分六冊(送料共)壹圓半錢
壹ケ年分十二冊(送料共)三圓半錢
振替口座東京〇五七貳番

廣告料は御照會次第お答へいたします

▽御注文は必ず前金で御拂込み下さい
▽送金は小爲替でも切手代用でも宜敷う御座います
▽切手代用は(零錢切手)一割増に願ひます

(意注)▽御注文の場合は第何巻第何號よりと云ふことをばつきり書いて下さい
▽住所姓名は丁寧に分りよく御書きください

大正九年七月五日印刷刷本(毎月一回)
大正九年八月一日發行

編輯人 齋藤 佐次郎
東京府下田編三五十一番地
發行所 廣山 壽 篤
東京市麹町區飯田町六丁目二十五番地
印刷人 大 橋 光 吉
東京市石川區久堅町百八番地
印刷所 株式會社博文館印刷所
東京市麹町區飯田町六丁目二十五番地
發行所 キンノツノ社

大正八年十月十六日 大正九年七月五日刊 刷 納 本
第三編 傑作選 大正九年八月一日發行 (毎月一回一日發行)

東京 キンノツノ社 發行

西村アヤ作及畫 (三版發賣!!)

繪入。ピノチヨ 童話

山本 鼎先生序、沖野岩三郎先生跋

定價

金壹圓卅五錢

(送料拾二錢)

▼「ピノチヨ」は伊太利の有名な童話で、外國では「インツブ」や「アラビヤン、ナイト」の様に廣く讀まれてゐます。アヤ子さんは、毎晩食堂の出窓の所で、この面白い話をお父さんから聞いたのです。それから一年程たつてアヤ子さんが十二歳になつた時記憶を辿り乍ら書いたのが此の「ピノチヨ」です。

▼ピノチヨといふのは、お話の中に出て來るあやつり人形の名ですが、こいつ中々面白いやつで、親不孝をしたり、人にだまされたり、魚に食べられて了つたり、實にたまらなく面白い事をやります。

▼大人の書いた童話とは別な面白味があるので、此の本が讀まれたらどんなに多くの人が驚くだらうと讀賣新聞でも批評してゐました。

□ □ 東京 荻原 町 麴 京 東 □ □
社 ノ ツ ノ キ 町 田 飯 區
□ □ 京 東 荻 原 二 七 五 〇 三